〔論　説〕

近代英語における，命令法で「待て」を表す動詞群の用法と通時的競合*

山　﨑　　聡

1. はじめに

現代英語で相手に指示的に「待て，ちょっと待って」と伝える最も頻繁に用いられる表現は，(1) にみるように，動詞 wait の命令法，あるいはこれにしばしば a moment/minute/second 等の語句を組み合わせた表現と言えよう（以下，用例中の太字は筆者による）。[(1)]

(1) a. 'In the week I work for man, but on Sunday I work for God. That's better work, don't you think? **Wait a moment**, I have something to do here.' He stopped at a gate, and in large red letters on the middle bar of the gate he painted some words from the Bible: PUNISHMENT AWAITS YOU
(British National Corpus (BNC) ; GW8)

b. 'Then I'll take my leave of you.'
'**Wait**,' she said as he turned towards the door. 'There is one thing I'd like to know.' (BNC; JY5)

c. "**Wait a minute!**" he broke in. "This is not giving her a fair hearing!"
(*The COBUILD Advanced Dictionary of American English*, 5th Edition (*CADAE5*))

同じ「待て」でも，それが用いられる場面を考慮すると，(1a–c) では用法の違いを認めることができそうである。まず，(1a) の Wait（以下，命令法の Wait（a minute/second/moment）に属する表現を単に Wait と表記する）は，男性が女性に話しかけてから，2，3 回会話のやりとり（turn）があった後に，男性が「ここで少し待っていて下さい。」と述べてい

＊　本稿は英語コーパス学会第 41 回大会（2015 年 10 月 3 日，於愛知大学）にて「*Hold—oh, hold! Stay, my Lords! Ere ye commit A deed,* －近代英語における「待て」を表す語彙の役割分担，競合と入れ替え」という題目で口頭発表した内容に修正を施した論文を再検討し，さらに大幅な修正を加えたものである。論文は再検討の後，某誌に再投稿するつもりであったが，意を尽くすには規定の分量をはるかに超えてしまったため，本紀要に寄稿した。学会発表にて，また元論文に対して大変貴重なご質問・ご意見を頂いた方々に厚くお礼申し上げたい。

(1)　British National Corpus（BNC）の 1985 から 1993 年の間に出版された Fiction の Prose と Drama のサブコーパスにおいては，「待て」に相当する命令文の wait（a minute/moment/second － 以下の動詞（句）も同じ），hang on，hold on，stop（it），及び just a minute/moment/second 中で，wait の頻度が最も高い。なお，調査では please を前後に伴うものも対象にしたが，Can you wait a moment, please? のような［助動詞 ＋ 主語］を含んだ複合形は対象にしていない。なお，本稿では BNC の検索は BNCweb に拠った。

る。このWaitは動詞waitのいわば文字通りの語義,「待つ」"wait for a short while"が命令法で用いられた用法と言えるかもしれない。(1b) は,(1a) の下位用法と捉えることもできそうだが,その場を去って行こうとする相手を引き留めて,「ちょっと待って」と述べている。*The Longman Advanced American Dictionary,* 3rd Edition, s.v. wait[1] 5aには,"used to stop someone for a short time when he or she is leaving or starting to do something"の語義がみられる。さらに,(1c) のWaitは*CADAE5*で"**Wait** is used in expressions such as **wait a minute**, **wait a second**, and **wait a moment** to interrupt someone when they are speaking, for example, because you object to what they are saying or because you want them to repeat something."(太字は原文のまま)の用例として挙げられたものである。"he broke in"で分かるように,このWaitは相手の発言を遮ぎる,阻止する効果をもつ。

いずれの用法にしても,(1) は現代英語ではごくありふれたWaitの事例であるが,これらWaitの命令法の用法の歴史は思いの外浅く,本稿で調査したThe Corpus of Late Modern English, Version 3.0 (CLMET) では,その出現は18世紀の終盤である。それ以前の近代英語期にWaitの代わりに用いられていた代表的な動詞は,stayとholdであった。まず,命令法で用いられたstay (以下,Stay) の使用例を観察しよう。(2a) では,銃による決闘をしようというふたりが,間合いを取っている場面である。Acres が間合いを取ったところに,Lucius が異を唱え,「ちょっと待ちたまえ。」と述べ,彼なりの間合いを取って見せる。このStayの用法は先のWaitの (1a) の用法と同様であろう。次に (2b) では,Florindaがカーニバル (舞台はイタリアのナポリ) で変装して,彼女に思いを寄せるBelvileの手相を見ながら,今夜Garden-gateにFlorindaがやって来ると彼にいう。ところが,彼女は自分のgovernessのCallisに見られていることに気づき,急ぎその場を去ろうとする場面である。(*Offers to go*というト書きがある。) Belvileはきちんと話を聞きたいので,これを"stay"と引き留めているが,このStayはWaitの (1b) に相当する用法と言える。また,(2c) では"Stay, stay"は自分を処刑しようとする者に対して,その行為を制止する効果をもっている。先のWaitの (1c) は,相手の発言を阻止しようとする効果をもつものであったが,共に相手の発言もしくは行為を阻止,遮ろうとする用法として一括して捉えることも可能であろう (以下,用例中のイタリック体は原文のまま)。

(2) a. Sir Luc. Is it for muskets or small field-pieces? upon my conscience, Mr. Acres, you must leave those things to me.—**Stay** now—I'll shew you.
[Measures paces along the stage.
there now, that is a very pretty distance—a pretty gentleman's distance.
(CLMET P1[(2)], Sheridan, *Rival*)

b. Belvile. Thou hast nam'd one [つまりFlorindaの名前] will fix me here for ever.

(2) CLMETは1710年から1920年に至る小説,戯曲,論説,エッセー,書簡等を収録したコーパスであるが,70年ごと3期に分かれている。本稿では,1710–1780をPeriod 1 (P1),1780–1850をPeriod 2 (P2),1850–1920をPeriod 3 (P3) と表記する。なお,本稿での18世紀のCLMETからの引用例のほとんどは,Michigan大学のEighteenth Century Collection Onlineのテキストより採ったものである。理由は,CLMETのテキストには,時に文字化けが含まれていることによる。

Florinda. She'll be disappointed then, who expects you this Night at the Garden-gate, and if you'll fail not—as let me see the other Hand—you will go near to do—she vows to die or make you happy. [*Looks on Callis, who observes 'em.*]
Belvile. What canst thou mean?
Florinda. That which I say—Farewel. [*Offers to go.*]
Belvile. Oh charming Sybil, **stay**, complete that Joy, which, as it is, will turn into Distraction!—Where must I be? at the Garden-gate? I know it—at night you say—I'll sooner forfeit Heaven than disobey. (Behn, *The Rover*, 1677)

c. But, when I reflected on the Wrythings of *Barbar,* the bare Sight of which my Spirit was not able to support; when I saw such an Apparatus of additional Torments; and when they took me in Hand, for instant Execution, I utterly lost my Senses; I shrunk inward with Fear, my Hairs stood on End with Horror; my Tongue found sudden Utterance, and, I cried, **Stay, stay**, I will say, I will do whatever you enjoin. (Brooke, *The Fool of Quality*, CLMET P1)

現代英語のWaitの用例(1)に相当する用法は，近代英語期の命令法のhold（以下，Hold）にもみられる。(3a)はA Corpus of English Dialogue 1560–1760（CED）に収録されている，フランス語の語学教本中のサンプル・ダイアログの一節である。AからDの4名による会話が例示されているが，当該の部分はそのうちAとDとのやり取りの部分である。Dが「自分で注ぐ。ボトルをよこしてくれ」と言ったのに対して，Aが“Hold”を用いて，「ちょっと待ってくれ，ほら，どうぞ」とボトルを手渡している。この“Hold”は「そのまま少し待って」という意味で，(1a)と(2a)の用法と同様であろう。また，(3b)は(1b)と(2b)と同様，相手が去って行こうとするのを引き留める用法，(3c)は(2c)と同様，相手の行為を阻止しようとする効果を表すと言えよう。

(3) a. [$ (^D.^) $] I have drunk but one cup, make haste then, that I may drink at my turn.
[$ (^A.^) $] Let me see the cup, Sir, I will help you.
[$ (^D.^) $] I will help my self, give me the bottle.
[$ (^A.^) $] **Hold**, here it is, it is almost empty.
[$ (^D.^) $] There is enough still for me.
(CED P3, Festeau, *A New And Easie French Grammar*)

b. I am, indeed, very unhappy, but I will not be importunate, Adieu, dearest of Creatures, adieu, for ever! I spoke, and suddenly withdrew, and gave her, as I imagined, the last farewel Look.
Hold, Sir, she cried, pray stay a Moment. I should be wretched, beyond Expression, if you went away in the greatest of all Errors.
(CLMET P1, Brooke, *The Fool of Quality*)

c. This Sight inflaming me with Rage against that impious Ravisher; I flew towards him: And when I came within hearing; **Hold**, Wretch! cried I, and cease to offer

Violence to that Lady, whom thou bearest away by Force;
（CLMET P1, Lennox, *The Female Quixote*）

さて，これまで，現代英語ではごくありふれた，指示的な発話行為を表すWaitは，18世紀終盤に出現した後進の表現で，それ以前の近代英語期では同様の意味を伝えるのに，StayとHoldが用いられていたことをみた。すると，ここで2つの疑問が湧く。ひとつは，近代英語におけるStayとHoldは，(2) と (3) を観察する限りは同様の使い方であるが，類義語には一般に何らかの違いがあることを考慮すると，両者にはどのような違いがあったのか，という問いである。*The Oxford English Dictionary,* Second Edition, Version 4.0 on CD-ROM（*OED2*）のstayとholdの記述をみると，その違いが部分的には示唆されるが，本稿ではそれぞれの用例を文脈の中で吟味することで，StayとHoldには重なる部分がある一方，用いられる用法の傾向に違いがあり，両者には一種の役割分担もあったことを実証的にみていく。

もうひとつの疑問は，StayとHoldは現代英語ではWait等に取って代わられたが，Waitに至るまでの「待て」を表す動詞群の競合と交替は，一体どのような過程であったのか，という問いである。17世紀半ばからの動詞の競合を調査した結果，StayとHoldは，大抵の用法でWaitよりもまずは命令法のstop（以下，Stop）に，より多く取って代わられたことが判明する。Stopは今日ではWaitに比べて指示的な「待て」を表す表現としては影が薄いが，[(3)] かつて，18世紀終わりから20世紀の初め頃の間は，「待て」を表す過半数の主要な用法において，Waitを凌ぐ動詞であった。

以下，2節では，指示的な「待て」を表すStay，Hold，Stop，Waitの違いについて，*OED2*のこれら4動詞の語義記述からどのような示唆が得られるかを検討する。3節では，まず，本調査で用いたコーパスと作品群を紹介する (3.1)。本稿では，StayとHoldの相違は用いられる用法の傾向の違いに表れ，また，4動詞間の通時的な競合と交替の様子も，異なる用法ごとに競合を調査することで，その実態がより明らかになることをみていく。本稿では，その「待て」に相当する用法に5つを設定するが，3.2では，その5用法を実例と共に詳述する。4つの動詞に5用法を認めることができることを確認したところで，4節では先に挙げた2つの問いに答える。つまり，ひとつは，近代英語期に「待て」を表す代表的な動詞であったStayとHold の違いについてであるが，StayとHoldの異なる用法の分布の型を比較することで，2つの動詞には，競合する部分と一種の役割分担の双方があったことをみる (4.1)。もう一つの問いは，4動詞の通時的な競合と交替はどのようなものであったのかというものだが，その競合と交替は用法間で異なる様相を呈することをみる（4.2)。5節はまとめである。

2. 先行研究：*OED2*から示唆されることとその限界

本稿で扱っている，類義語，類似の機能をもつ語彙の史的な競合・交替については，形

(3) BNCの1985から1993年の間に出版されたFictionのProseとDramaのサブコーパスによる調査によるものである。現代英語では，Stop itが特に相手の行為を阻止する表現として，Stopよりも一般的だが，CLMETでは，Stopより出現が遅く，20世紀初頭までは極めてまれである。

態論や文法化が関わらないものに限っても多くの調査・研究が蓄積されてきた。よく知られたものでは,「秋」を表すharvest > fall (of leaves) > autumn,「犬」の総称としてhound > dog,「結婚する」を表すwed > marry (Fischer, 1997) の交替が思い浮かぶ。[(4)] Politeness markerとしてのpray > pleaseの交替にも言及がみられるAkimoto (2000), 願望を表す動詞desire, hope, wish, wantの間で起きた補文の型の通時的な交替を指摘したAkimoto (2008), alway > alwaysの交替を調査したIyeiri (2014) 等の研究も挙げられよう。また,(意志) 未来を表す表現の通時的な競合を扱った研究では, 後期近代英語において「未来についての予測」,「意志」,「取り決め・予定」等の意味を表すのに用いられた (疑似) 法助動詞・進行形の通時的な競合を扱ったNesselhauf (2012), 近代英語期の聖書にて未来を表すギリシャ語に当てられた訳語を手掛かりに, 未来を表す表現の競合・変遷を調査した渡辺 (2016) がある。最後に, Stoffel (1901) は競合が中心的なテーマではないが, 英語史におけるful, very, pure, right, quite, soなど, 特に強意詞の消長を扱った古典的な研究として知られている。[(5)] こうした多様な調査・研究の中にあって, 近代英語において命令法で「待て」を表す動詞の相違や競合・交替を扱った調査・研究は, 筆者の知る限り, これまでに行われてこなかった。

The Historical Thesaurus of the Oxford English Dictionary (*HTOED*) はある特定の意味・概念を表す語彙の古英語から現代英語に至る変遷を, 極めて広範囲にわたる概念分野にわたり記載した画期的な辞典である。その中には,「行為の阻止 "cease from (an action or operation)"」を表す動詞の史的変遷も含まれているが, 指示的な「待て」を表す動詞の交替は扱われていない。また, 仮に扱われていたとしても, 動詞間にどのような違いがあったのかという点については, この辞典が拠る*OED2*の関連する項目を参照することになる。

一方, *OED2*のstay, holdとstopの語義記述を読むと, これらの動詞の命令法での用法の違いの一端をうがい知ることができそうである。これらの動詞の語義の内, 命令法の「待て」の用法に関連すると考えられる個所を以下に引用する。(各語義の後のかっこ ( ) 内の番号は*OED2*の語義番号をそれぞれ表す。また, 以下, 辞書からの引用文中のイタリック体・太字はすべて原文のまま。)

Stay

(i) To remain inactive or quiet; to wait (without doing anything or making progress); to put off action (*until*). Cf. *stay for*, 14 b. ?*Obs*. (9)

(ii) To wait or tarry for (a person or thing) before doing or beginning to do something. Sometimes contextually, to be compelled to wait for. *Obs*. (14. b)

(iii) To cease going forward; to stop, halt; to arrest one's course and stand still. *Obs*. (1)

(iv) To cease or desist from some specified activity. Const. *from*. *Obs*. or *arch*. (2)

---

(4) 他に, Kay and Allan (2015: 87–89) の事例紹介を参照。

(5) 文法化が関わらない語彙の交替に関わる研究例として挙げたが, 純粋な形容詞あるいは副詞であったものが, 強意語として機能するようになる過程については, それを文法化の一例と捉える向きも多い。実際, Stoffel自身, 名詞の前で「まさに…」の意味や焦点化副詞として「…でさえ (even)」の意味で用いられるveryについて, "It is a purely grammatical function, and *very* has in this case become an <<empty>> word" (Stoffel: 32) (カッコは原文のまま) と述べている。

(v) † To cease speaking, break off one's discourse; to pause, stop or hesitate before speaking. Said also of a discourse. *Obs*. (2. b)

(vi) In *imp*. used as an injunction to pause, arrest one's course, not to go on doing something. Hence often = give me time to consider, decide, etc.; wait for me to make some remark or give some order. (2. c)

Hold

(i) (for *refl*.) To restrain oneself, refrain, forbear; to cease, stop, give over. Often in *imp*. as an exclamation: = Stop! *arch*. (27)

Stop

(i) *intr*. To cease from onward movement, to come to a stand or position of rest. More emphatically ***to stop dead, stop short*** (see DEAD, SHORT *advs*.). Said of a person or other living creature, also of an inanimate thing driven or propelled. (34. a)

(ii) *imp*., used as an injunction to pause in or desist from any procedure, as speech, argument, criticism, and the like. Also in the phrase ***stop a moment!*** (37. d)

まず，Stayの(i)～(vi)の6つの語義の内，(i)と(ii)は，おおむね先の(2a)の「ここで(そのまま)少しお待ち下さい」に相当すると考えられる。(iii)はStayの最も古い語義であるが，(2b)の相手が去って行こうとするのを引き留める用法は，この語義が命令法で具現したものと考えることができよう。最後に，(iv)，(v)と(vi)は，(2c)の相手の行為や発言を阻止しようとする語義であろう。次にholdの語義記述を検討すると，指示的な「待て」の諸用法に関連があると思われるのは，上に示したhold, *v.* の語義27番と考えられ，それは，その引用例(quotations)も併せて判断すると，おおむね「人の行為を抑える，妨げる」ことを意味している。これは(3c)でみた，相手の行為や発言を阻止しようとする語義に相当するであろう。また，*OED2*のstopの語義の中では，(i)が「引き留め」に，(ii)が「行為・発言の阻止」に相当するであろう。

つまり，*OED2*の語義記述によれば，Stayは「そのまま少しお待ち下さい」，「引き留め」と「行為や発言の阻止」の3用法で，Holdは「行為や発言の阻止」でのみ，Stopは「引き留め」と「行為や発言の阻止」の2用法で用いられる，と推測される。Stay，HoldとStopの実例を文脈の中で丹念に調べると，実のところ，この推測は，「待て」を表す3つの動詞の違いをある程度言い当てている。一方では，これだけの情報では，StopはStayとHoldに比べて後発であることを除いても，例えば，Stayには3つの用法がありそうだが，いずれかの用法が他に比べてよく用いられたことはなかったのか，StayとHoldは共に相手の「行為や発言を阻止する」のに用いられるが，どちらかの動詞の方がその用途により用いられたということはなかったのか，StayとStopは2つの用法を共有していることから，Stopは全体的に，HoldよりもStayに用法が近かったのか，それ故その分よりStopとの競合の影響を受けたのか等，不明な点もまた少なくない。

本稿で，指示的な「待て」を表す動詞Stay，Hold，Stopの競合形とみなすwait（以下，命令法で「待て」を表すwaitをWaitと表記）については，*OED2*の関連する語義記述は，お

そらくその語義7. aの "*intr*. or *absol*. To remain in a place, defer one's departure until something happens. Often ***to wait for*** = sense 6." のみかと考えられる。この語義は，(1a) から (1c) にみたWaitの3つの用法の中では，(1a) の「ここで少し待っていて下さい」に近いと思われるが，すると，Waitにはこの用法だけが認められるというになる。しかし，(1b) と (1c) の意味について現代英語の英英辞典の語義記述を紹介したように，Waitにも「引き留め」や「行為や発言の阻止」の用法があることは明らかであろう。確かに，これらの英英辞典には当該の用法はwait a minute/moment/secondのイディオムとして記載されてはいるが，現代英語と同様，本稿で対象とする近代英語でも，Wait はa minute/moment/secondの有無にかかわらず，「引き留め」や「行為や発言の阻止」にも用いられた。すると，Stay，Hold，Stopに加えて，Waitも指示的な「待て」を表す動詞の競合に関わることになるが，その関わり方はどのようなものであったかは調査を待たねばならない。

3. 使用コーパスと指示的な「待て」を表す4動詞の諸用法

2節では，指示的な「待て」を表すStay，Hold，Stop，Wait の4つの動詞の用法について，*OED2* の語義記述から読み取れる情報を確認した。本節では，コーパスと諸作品にてこの4動詞の用例を精査することで，4動詞に共通する5つの用法を設定し，それを手掛かりに4動詞の相違とその競合を解明したい。まずは，調査に用いたコーパスと作品群を紹介し (3.1)，その後に，4動詞に観察される5つの用法について詳述する (3.2)。

3.1 調査対象の時期と使用コーパス

本節では，調査対象の時期と調査に用いたコーパスと作品群を紹介する。まず，17世紀半ばから20世期初頭までの300年弱にわたる調査対象期間の内，1710年以降は，70年ごと3期からなるコーパス，CLMETを利用した。すでに注2で触れたように，このコーパスは小説・戯曲のフィクションと論説・エッセー・書簡等のノンフィクションから構成される。検索はコーパス全体に対して行ったが，本稿で調査対象とする「待て」という口語表現の性質上，ほとんどの用例は小説と戯曲から得られた。しかし中には，書簡や*Punch* 誌に掲載された口語体のエッセー等より得られた用例も少数あった。

1710年より前の70年間，つまり，1640年から1709年については，基本的なコーパスとして，the Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English, release 2 (PPCEME) の第3期 (e3; 1640–1720) 及びCEDの第3期 (P3; 1640–1679) と第4期 (P4; 1680–1719) を利用した。CEDはこの時期の，基本的に会話調の英語を収集したコーパスで，戯曲 (喜劇)，法廷での裁判記録，裁判に先立って聴取された証人・被告人等の証言，フランス語やドイツ語学習のための教本，あるいは外国人向け英会話教本，宗教教育・魔術等についての対話形式の実用本 (pamphlet) などから構成されるコーパスである (Culpeper and Kytö 2010参照)。PPCEMEのP3には1720年までの資料が含まれるが，本調査での該当例はすべて1709年までのものであった。また，CEDのP4の1710年以降1719年までの資料に，Stayの用例が検索されたが，これらの用例は調査から除外した。PPCEMEとCEDのP4の双方にFarquhar (1707) *The Beaux Stratagem* が収録されているが，両コーパスからの重複例はそれぞれ1例として数えた。しかしながら，このPPCEMEとCEDからは十分な数

表1　使用コーパス及び作品群

期間	第1期	第2期	第3期	第4期
	1640-1709	1710-1779	1780-1849	1850-1899
コーパス・作品群	PPCEME e3	CLMET P1	CLMET P2	CLMET P3
	CED P3, P4			
	戯曲(6), 小説(1)*			

*第1期 (1640-1709) 作品群内訳

Aphra Bahn, *The Rover,* 1677
John Bunyan, *Pilgrim's Progress*, Part 1, 1679
John Dryden, *Marriage a la Mode*, 1672
Richard Brome, *A Jovial Crew*, 1652
Richard Brome, *The Court Beggar*, 1653
William Congreve, *Love for Love*, 1695
William Wycherley, *The Country Wife* [Act 1, Act 3の一部, Act 4], 1675

の用例を収集することはできなかった。そこで，これら2つのコーパスに加えて，この時期に出版された，主に戯曲作品から用例を採取した。まとめると，本調査では表1に示すコーパス・作品群をデータに用いた。(6)

3.2 命令法で「待て」を表す4動詞にみられる5つの用法

近代英語において，命令法で「待て」を表すStay，Hold，StopとWaitには，用いられる用法の傾向に違いがみられ，そこに役割分担がみられることもある。また，用法別に4動詞の交替を調査することで，交替の実態がより明らかになる利点がある。本節では，こうした観点からの考察の準備作業として，4動詞に共通してみられる用法に5つを認め，その実例を提示する。併せて，単独の用法で用いられるのではなく，複数の用法が重層的に，もしくはまれにあいまいに用いられた用例も存在することにも触れる。(7) *OED2*やwaitとそれに関連するhang on等の表現についての現代英語の各種英英辞典の記述を参考にし，また，実例を文脈の中で精査することで，本稿では「待て」の意味で用いられる4動詞の用法に次の5つを設定した。(以下，この「待て」の5用法を，カギカッコ［ ］に入れた数字で示す。)

[1] 聞き手に対して「ここで（このままで）少し待っていて下さい。」と伝える。それゆえ，時に「少し時間を下さい。」の意味をもつ

[2]「去って行こうとする人を引き留める」あるいはよりまれに「移動中の人を引き留め

(6)　第1期の追加作品には小説をさらに含めたかったが，5点ほど検索した作品には該当例は皆無で，断念した。また，リストにあるWycherley, *The Country Wife*は，Act 2及びAct3の一部はCEDのP3に収録されているので，そのAct 1，Act 3のCEDと重複しない部分及びAct 4よりデータ収集を行った。なお，各追加作品より得られた用例数は，4.1の注13で提示するところがある。

(7)　異なる用法が重層的に使用されている（観察される）可能性を十分に検討することをご助言頂いた，某誌査読者に感謝申し上げたい。また，元論文は英文によるものであったが，本稿で用いる「重層的」という表現も同査読者による。

る」効果をもつ
[3]「相手の行為や発言を阻止，遮る」効果をもつ
[4]「相手に異議を唱える，抗議する」あるいは「相手の注意を引く」(attention-getter) 効果をもつ
[5]「新たな状況に気づいて，あることを思いついて，思い出して」用いる

この内，[1]，[2] と [3] の用法はすでにWait，Stay，Holdにみられる用法として指摘済みではあるが，以下，Stopの用例も含めて，[1] から [5] の用法の内容を詳細にみていく。

まず，用法 [1] は，基本的には「ここで (このままで) 少し待っていて下さい。」"wait for a short while" の意味を伝達するもので，現代英語ではwait「待つ」の基本義が，直接的に命令法で具現した用法と言えるかもしれない。用法 [1] の用例は，すでにWait，Stay，Holdについては (1a)，(2a) 及び (3a) でそれぞれ観察済みであるので，ここではStopがこの [1] で用いられた用例を1例示す。(4) では，Tomがドアを開けてくれと言うので，Martinが「ちょっと待ってくれ」"Stop a moment" と言い，かんぬきを一本外している。これは，用法 [1] の事例と言えよう。なお，既出の (1a)，(1c) のように，4動詞の後にa [one] moment/minute/second等の語句が付くタイプの用例も，本調査では該当例に含めている。

(4) "Open, Martin, old boy—it's only I, Tom Brown."
"Oh, very well, **stop a moment**." One bolt went back. "You're sure East isn't there?" "No, no, hang it, open." Tom gave a kick, the other bolt creaked, and he entered the den. (CLMET P3, Hughes, *Tom Brown's Schoolday*)

次は，Ireneに決断を迫っているDemetriusに「少し待って，考える時間を少し下さい。」と述べている。「そのまましばらく待って下さい」は「少し時間を下さい」に直接的につながるので，本調査では，この用法も用法 [1] に含めた。

(5) DEMETRIUS. Now make thy choice, while yet the pow'r of choice
Kind heav'n affords thee, and inviting mercy
Holds out her hand to lead thee back to truth.
IRENE. **Stay**—in this dubious twilight of conviction,
The gleams of reason, and the clouds of passion,
Irradiate and obscure my breast, by turns:
Stay but a moment, and prevailing truth
Will spread resistless light upon my soul. (CLMET P1, Johnson, *Irene*)

最後に，用法 [1] のやや特殊な用例をHoldの用例でみておく。次では，処刑の危機にさらされた司祭が悪の誘惑に屈する場面である。このHoldは相手の性急さをたしなめる意味合いをもつと言えるが，[1] の「(私に) 少し時間を下さい。」は相手に対して「そんなに慌てないで。」にも直截につながる。そこで，本稿では，次のような，相手の性急さをたしなめる用法は [1] に含めた。

(7) He [=The monk] signed the fatal contract, and gave it hastily into the evil Spirit's hands, whose eyes, as He received the gift, glared with malicious rapture.
'Take it!' said the God-abandoned; 'Now then save me! Snatch me from hence!'
'**Hold**! Do you freely and absolutely renounce your Creator and his Son?'
'I do! I do!'
'Do you make over your soul to me for ever?'
'For ever!' (CLMET P2, Lewis, *The Monk*)

次に，用法 [2] を確認しよう。この用法は「去って行こうとする人を引き留める」，あるいはよりまれに「移動中の人を引き留める」効果をもつ用法である。前者の用例は，すでにStay，Hold及びWaitについてはみたので，ここではStopの用例を1例挙げておく。(8) では，死の床にあるMrs. Reedがギャンブル狂の息子Johnのことを嘆き悲しみ，興奮している。その様子をみたJaneがその場を立ち去ろうと立ち上がったところで，Mrs. Reedが "Stop!" と述べて引き留めている。

(8) . . .—I feel ashamed for him when I see him [=John]." She [=Mrs. Reed] was getting much excited. "I [=Jane Eyre] think I had better leave her now," said I to Bessie, who stood on the other side of the bed. "Perhaps you had, Miss: but she often talks in this way towards night—in the morning she is calmer." I rose. "**Stop!**" exclaimed Mrs. Reed, "there is another thing I wished to say. . . ."
(CLMET P2, Charlotte Brontë, *Jane Eyre*)

用法 [2] では，いずれの動詞も (2b)，(3b)，(8) のように，「相手が去って行こうとするところ，もしくはすでに去って行きつつあるのを引き留める」用法が多いが，(9) のように，話者がその場に留まっているのではなく，相手に追いついて行き，その人物を引き留めるものも含まれる。Stopの用例から1例挙げる。なお，このstopはprayを伴っているが，本稿では4動詞にpray，please，あるいは強調のdoが先行する事例も調査対象に含めている。

(9) Their parting was protracted by so many courtesies and compliments from the old lady, that her patience was almost wearied out; at last she got free from her, and quickened her pace towards home, when on a sudden she heard her in a tremulous voice calling out, Madam, madam, **pray stop one moment**.
Sophia looked back, and seeing Mrs. Gibbons come tottering up to her with more speed than was consistent with her weakness, she met her half way, and smiling, asked her why she had turned back. (CLMET P1, Lennox, *Sophia*)

また，本調査ではHoldの使用例は観察されなかったが，他の動詞では，(10) のStayのように，話者から去って行くのではなく，近くを進行中の人を制止する場合に用いられたものもあった。(10) は裁判でのBedlowという人物の証言である。Bedlowとその友人以外はその部屋から出て行くことになったが，部屋から出て行こうとする者の中に，自分の友

人がいることに気づいて，その者を“Oh! pray Sir stay”と引き留めた，とBedlowが述べているくだりである。

(10) The press being great, and being desirous to be private my self, I spoke to the Guard to put all out that had no business there, and they cried out, that all should avoid the Room but *Mr. Bedlow* and his Friends. And when he was going out with the rest, he lift up his Hat to see his way; and though before I did not mind him, yet I happened at his passing by me to cast my eyes upon his face, and presently knew him, and cried, Oh! pray Sir **stay**, you are one of my friends that must stay here. (CED P3, *Tryals of Robert Green [etc]*)

さらに，これはStayの用例にはみられなかったが，共に移動している者が，同行者を引き留める事例もある。Holdから1例挙げる。(11) では，馬付きすきで，馬を操縦していた私がすきを担当している者に“hold!”と述べさせることになった，と書かれているが，このHoldは一緒に移動中の者を引き留める効果をもつ。

(11) I threw away the whip, and having seized the handle of the plough, a struggle ensued, which led to blows. At length, the horses and plough were both abandoned, and a regular fight took place between myself and the under carter, who had been holding the plough to which I was the driver. I soon, however, compelled him to cry “**hold!**” and without farther ceremony I took the plough and he the whip.
(CLMET P2, Hunt, *Memoirs of Henry Hunt, Esq.*)

これら (9) – (11) の事例を考慮すると，用法 [2] は「去って行こうとする人を引き留める」効果のほかに，「移動中の人を引き留める」効果を表す用法ということになる。

最後に，この用法 [2] と [1] との関連について触れておく。用法 [1] は，聞き手に「ここで (このままで) 少し待っていて下さい。」と指示する用法であるが，これは用法 [2] の中心的な用法と考えられる「去って行こうとする人を引き留める」用例にも当てはまると言える。しかし，逆に，用法 [1] の用例として挙げたものには，[2] の「去って行こうとする人を引き留める」意味・効果はないことに注意されたい。言い換えれば，用法 [1] は [2] を包括する，より上位の意味・用法で，用法 [2] は [1] の下位用法と捉えることができるかもしれない。[8]

(8) しかし，この語義の上位関係 (hyponymy) は史的な意味拡張の結果であるかは不明である。すでに2節で触れたように，Stayの用法 [1] は*OED*2 s.v. stay *v.*の語義9 (To remain inactive or quiet; to wait (without doing anything or making progress); to put off action (until) . . . ?*Obs.*) や語義14b (To wait or tarry for (a person or thing) before doing or beginning to do something. Sometimes contextually, to be compelled to wait for. *Obs.*) が命令法で具現したものと思われる。一方，Stayの用法 [2] はstay *v.*の第1の語義区分“To cease moving, halt”の下にある，語義1の† To cease going forward; to stop, halt; to arrest one's course and stand still. *Obs.* が命令法で具現した用法と捉えることもできる。そして，語義9の用例の初出は16世紀半ば，語義14bは16世紀終わりであるのに対して，語義1の用例の初出は15世紀半ばで，用法 [2] に相当すると考

[1] そのまま少し待って
↓
[2] 去らずにそのまま待って

次に，用法 [3] を確認しよう。用法 [3] は「相手の行為や発言を阻止する，遮ろうとする」効果をもつものである。行為を阻止しようとする用例はすでに (2c) と (3c) で観察したので，ここでは発言を阻止する効果をもつ実例を取り上げよう。この用法 [3] では，とりわけ相手の発言を遮ろうとする場合には，*The Longman Dictionary of Contemporary English,* 5th Edition (*LDOCE5*) の wait の定義にもあるように，次にみる，用法 [4] の「相手に対する異議」の意味を伴うことがしばしばある。

used to interrupt someone, especially because you do not agree with what they are saying: *Wait a minute! That's not what we agreed!* (*LDOCE5* s.v. *wait*[1] v. 3b)

この「相手に対する異議」の追加的なニュアンスにも注意を払いつつ，「発言の阻止」の効果をもつと考えられる 4 動詞の用例を (12) に検討してみよう。

(12) a. ". . . He who sinned has suffered more than would atone the crime! You charge me with my love to Evelyn. Pardon me, but I seduced no affection, I have broken no tie. Not till she was free in heart and in hand to choose between us, did I hint at love. Let me think that a way may be found to soften one portion at least of the disappointment you cannot but feel acutely."
"**Stay!**" said Lord Vargrave (who, plunged in a gloomy revery, had scarcely seemed to hear the last few sentences of his rival) : "**stay**, Maltravers. Speak not of love to Evelyn! . . ." (CLMET P2, Lytton, *Alice, or, The Mysteries*)

b. ANGELICA: Bless me, Sir Sampson, what's the matter?
SIR SAMPSON: Odd, madam, I love you. And if you would take my advice in a husband—
ANGELICA: **Hold, hold**, Sir Sampson. I asked your advice for a husband, and you are giving me your consent. (Congreve, *Love for Love*, 1695)

c. It is my duty to prevent her return hither; said *Jerome*. She is where orphans and virgins are safest from the snares and wiles of this world; and nothing but a parent's authority shall take her thence. I am her parent, cried *Manfred*, and demand her. She wished to have you for her parent; said the Friar: But heaven that forbad that connection, has for ever dissolved all ties betwixt you: And I announce to your Highness*—**stop!** audacious man, said *Manfred*, and dread my displeasure.
*Manfred のことを指す (CLMET P1, Walpole, *The Castle of Otranto*)

えられる，後者の語義の方が古い。したがって，歴史的に用法 [1] から用法 [2] が派生したかは不明である。

d.“. . . But I happen to be an encumbrance in the way of another man. She was in love with him before she married me—she’s in love with him now—an infernal vagabond of a drawing-master, named Hartright.”
“My dear friend! what is there extraordinary in that? They are all in love with some other man. Who gets the first of a woman’s heart? In all my experience I have never yet met with the man who was Number One. Number Two, sometimes. Number Three, Four, Five, often. Number One, never! He exists, of course—but I have not met with him.”
“**Wait!** I haven’t done yet. Who do you think helped Anne to get the start, when the people from the mad-house were after her? Hartright. Who do you think saw her again in Cumberland? Hartright. Both times he spoke to her alone. . . .”
(CLMET P3, Collins, *The Woman in White*)

まず (12a) のStayと (12b) のHoldには，確かに相手の言葉に対して異を唱える効果が感じられるかもしれないが，主要な発話の機能は共に相手の発言を阻止するものと考えられる。つまり，(12a) では，Lord Vargraveは“Stay! Stay, Maltravers”と述べた直後に「Evelynに対する愛情のことを口にするな。」(下線部分を参照。ただし，下線は筆者による。) と述べている。また，(12b) では，Penguin Classics版ではSir Sampsonの台詞がダッシュによって途切れている。これは彼の発話がAngelicaによって遮られたことを示すものであろう。[9] 本稿では，(12a, b) の事例のように，2つの用法が関わっていると思われるものの，いずれかの用法が明らかに優勢である場合には，その優勢な用法の用例と判断する。[10] 他方で，(12c, d) では発話を遮る効果が極めて顕著であろう。(12d) は，以前に愛した男性はいないなどという女性には会ったことはないと相手が述べたのに対して，「私」が「いや，待て，私の話はまだ終わっていない。」と，続けて妻Anneに対する疑念を述べている場面である。見方によっては，この“Wait!”は会話の順番をとる機能と捉えることも可能であるかもしれない。しかし，それは実質的に相手の発言を遮るのに等しく，本調査ではいずれにしても用法 [3] に含める。

次に用法 [4]「異議を唱えて，抗議して」あるいは「相手の注意を引いて」(attention-getter) を検討しよう。この用法は，*OED2* のstay，hold，stopとwaitには記載がないが，*The Macmillan English Dictionary,* Second Edition (*MED2*) にはWait a minute/secondの語義の中に次の記述がみられる。

used for saying that you disagree with what someone is saying or doing, or that you want them to listen to you: *Wait a minute*, *that’s not what I said!*

(9) 用法 [3] の「発言の阻止」の効果をもつ事例には，この句読法がしばしばみられた。(12c) もまた別の用例である。

(10) Nesselhauf (2012) は，(意志) 未来を表す，will, shall, be going to, be to等の (疑似) 法助動詞と進行形の意味変化を調査するにあたり，当該の形式がある単一の主要な意味で用いられていると特定できる場合と，複数 (2つ) の意味のいずれが主要か判断できない場合とに分けてデータ処理を行っている。本稿はこのデータ処理を参考にした。

(*MED2* s.v. *wait*[1] v. Phrases, *wait a minute/second* 4)

この定義の前半は「異議を唱えて，抗議して」に，*or that* 以下の後半はattention-getterとしての用法にそれぞれ相当するであろう。

用法 [4] の「異議を唱えて，抗議して」については，[3] が主要な用法ながら、それに付随的に感じられる事例を (12a, b) にすでに観察したが，用法 [3] とは（ほぼ）独立して用いられていると判断されるものもある。(13) のStay，Hold，Waitは，それぞれ用法 [4] のみで用いられているか，もしくは用法 [4] が主要で [3] の効果は副次的と言えよう。(13a) では、相手が"None"ときっぱりと明言したのに対して、「いや、ありますよ。」と反駁している。ここでは、Stayは相手の発言を遮るというよりも、それに異を唱える働きを主に担っていると考えられる。(13b) では，Randallがbeggarたちの祝宴の最中に幕を開けるが，その祝宴の邪魔をされたことを，Patrico（beggarたちの長老）がみなの前でなじる。それに対して，Randallが「この祝宴を提供したのは私だぞ」と抗議している。(13c) は，夫婦が妻が担う家事について議論している場面である。

(13) a. "But, Mr. Pooter, let me ask you, 'What is the difference between the amateur and the professional?'
"None!!!
"**Stay!** Yes, there is a difference. One is *paid* for doing what the other does as skilfully for *nothing*! (CLMET P3, Grossmith, *The Diary of a Nobody*)

b. [PATRICO enters. Many of the beggars look out.]
Patrico. Tour out [=look out] with your glaziers [=eyes]*. I swear by the ruffin [=devil]*
That we are assaulted by a queer cuffin [=a churlish or contemptible fellow]*.
Randall. **Hold!** What d'ye mean, my friends? This is our master,
The master of your feast and feasting-house.
Patrico. Is this the gentry cove [=fellow]? (Brome, *A Jovial Crew*, 1652)
(*付きの語注，[…]* はRichard Brome Onlineより)

c. '. . . I should know that I ought to do what there was no one else to do [家事のことを指す], and make the best of it. But——'
'Make the best of it!' he interrupted indignantly. 'What an expression to use! It would not only be your duty, dear, but your privilege!'
'**Wait a moment**, Edmund. If you were a shopman earning fifteen shillings a week, and working from early morning to late at night, should you think it not Only your duty but your privilege?'
He made a wrathful gesture.
'What comparison is there? . . .' (CLMET P3, Gissing, *The Odd Women*)

用法 [3] の最後の用例として，「相手の注意を引いて」(attention-getter) と考えられるものを1例挙げておく。(14) では，財産は手に入らないものの，結ばれることを喜ぶ男女

GeorgeとArabellaの一方で，自分はその財産を手にすることができるとSquireが歓喜している。そこへJenkinsonが口を挟み，実はSquireは別の女性と結婚していて，その財産を受ける権利はないことを切り出す場面である。このHoldは，ある話が進んでいるところで「ちょっと待たれよ」と，その場にいる人の注意を引く機能をもつと思われる。あるいは，「注意を引く」というよりも，Squireの喜びように異議を唱える機能と捉えられるかもしれないが，両者は概念的に似通っており，本稿ではいずれにしても用法［3］に含める。

(14) "After all my misfortunes," cried my son George, "to be thus rewarded! Sure this is more than I could ever have presumed to hope for. To be possessed of all that's good, and after such an interval of pain! My warmest wishes could never rise so high!" "Yes, my George," returned his lovely bride, "now let the wretch take my fortune; since you are happy without it so am I. O what an exchange have I made from the basest of men to the dearest best!—Let him enjoy our fortune, I now can be happy even in indigence."—
"And I promise you," cried the 'Squire, with a malicious grin, "that I shall be very happy with what you despise."—"**Hold, hold,** Sir," cried Jenkinson, "there are two words to that bargain. As for that lady's fortune, Sir, you shall never touch a single stiver of it. Pray your honour," continued he to Sir William, "can the 'Squire have this lady's furtune if he be married to another?"
(CLMET P1, Goldsmith, *The Vicar of Wakefield*)

最後に用法［5］「新たな状況に気づいて，あることを思いついて，思い出して」用いる用法についてみる。この用法も*OED2*のstay，hold，stopとwaitに記載はないが，*LDOCE5*（s.v. *wait*[1] v. 3c; *hang on* 2b）や*The Oxford Advanced Learner's Dictionary,* 9th Edition（*OALD9*, s.v. *wait* v. Idioms, *wait a minute/moment/second* 2）など，複数の英英辞典に語義記述がみられる。以下に*LDOCE5* s.v. *wait*[1] v. 3cの定義を引用しよう。

used when you suddenly think of, remember, or notice something: *Wait a minute, I've got a better idea.*

つまり，この用法は新たな事態に気づいたり，何かを思いついたり，思い出した際に，多くは半ば独り言のように用いられる用法である。上記の例文はI've got a better idea.とあるので，思いつて「待って」，「待てよ」と述べている。現代英語のwait a minute, hang on等に記載されているこの用法は，(15) にみるように，Stay，Hold，Stopにも存在した。(15a) では，引用個所の直前で，Jeffreys（Jef）がCaesarに対して，今後は彼を奴隷の身から自由にすると述べたところ，Caesarは感銘のあまり，気を失う。Jeffreysは彼をあまり余る好意で殺してしまった，とてっきり思ったところ，Caesarが突然動いたことに気づき，"Stay"と述べている。このStayは新たな状況に気づいて独り言のように発せられている。また，(15b) では，Gondibertの意中の人，Ablinaはつれなくその場を去って行ってしまう。Gondibertは自らの失策を嘆くが，「待て，待て，この愚か者，ひとつ望みがあるでは

ないか。」と最後の手段に気づく。(15c) は書簡体の小説からの一節で，“stop”は別の話題を導入する機能を担っているとも言えよう。

(15) a. *Jef*. Hey, hey, Caesar—why Caesar! what the devil shall I do now? I've certainly kill'd him; and, damme, I shall get hang'd for my generosity without benefit of clergy! lord! lord! for they'll never believe I have kill'd him with kindness.—Why, Caesar! a pretty piece of work this!—Ah, Jeffreys, you have cross'd the line to a pretty purpose, truly—just to be tuck'd up o' the other side on't.—The fellow's certainly dead, and I've freed his soul instead of his body.—**Stay**—he moves;—why, Caesar, you dog, damme, you've frighted me out of my wits.
(CLMET P2, Starke, *The Sword of Peace*)

b. GONDIBERT.
Oh, stay—Albina, stay!
Hah, gone! Curse on my fierce impetuous passions!
What have I done? I've work'd her up to hatred—
In the sole moment that my fate allow'd
To win her from the purpose which undoes me.
Fool! fool! were *such* the arts I had devis'd?
Fury, and threats, are *ye* the wiles of love?
Oh, I have fix'd my fate!—Albina will be Edward's.
Hold, hold, thou cracking brain!—one hope's still left—
One road's still open, to prevent their marriage,
Or to escape the woe.—I'll challenge Edward:
He falls, or I; and which, to me is equal.
[Going. (CLMET P1, Cowley, *Albina, Countess Raimond*)

c. I will go through every sentiment in the Earl's correspondence before I quit BUXTON: all the books in all the languages are barren and deserve to be burnt, but the epistles of my STANHOPE. But—**stop**—I heard Mrs. HOMESPUN express her aversion to cheese; and (though I like it myself) I must hasten to order it may never appear again to offend her, Nothing is immaterial that pleases. (CLMET P1, Pratt, *The Pupil of Pleasure*)

「待て」を表す用法[1]～[4]が対人機能的用法であるのに対して，用法[5]の多くは，(15) のように，対人機能的というよりもむしろ話題の転換 (topic change もしくは topic shift) といった談話構成的機能を担うと捉えることも可能かもしれない。(11)

最後に，用法 [5] が感じられるものの，主要な用法は [3] 行為の措止で，したがって，本稿では [3] の事例に分類された用例をみておく。(16) では，僧侶に扮した Cedric が，囚われていた Front-de-Boeuf の城から首尾よく脱出した場面である。Front-de-Boeuf は，城か

(11) Topic change と topic shift の違いについては，例えば Finnell (1992)，Stenström (1995: 154–157) を参照。

ら出ていく僧侶に不審を抱いて矢を射るよう命ずるが，心変わりして，“stay”と述べている。このstayは確かに考え直して用いられている面もあるが，主要な機能は射手が弓を引くのを阻止するものと考えられる。既に述べたように，[5] はその意味・機能から基本的には半ば独り言のように発せられるものであろうが，ここではstayは明らかに対人的機能を担っていることに気づかれる。

(16) Turning then back towards the castle, he threw the piece of gold towards the donor［Front-de-Boeuf（a Norman baron）のこと］, exclaiming at the same time, “False Norman, thy money perish with thee!”
Front-de-Boeuf heard the words imperfectly, but the action was suspicious. “Archers,” he called to the warders on the outward battlements, “send me an arrow through yon monk's frock! Yet **stay**,” he said, as his retainers were bending their bows, “it avails not; we must thus far trust him since we have no better shift. I think he dares not betray me; at the worst I can but treat with these Saxon dogs whom I have safe in kennel. . . .” （CLMET P2, Scott, *Ivanhoe*）

以上,「待て」を表す4動詞に共通して認定できると考えられる［1］～［5］の5つの用法を，実例を挙げながら，詳述してきた。これまで観察した用例は，単独の用法で用いられているか，あるいは，別の用法が付加的に認められるものの，明らかに主要な用法が認められ，それゆえ，[1] から [5] のいずれかの用法に属すると判断された。しかしながら，中には2つの用法が重層的に用いられ（overlapping），そのいずれが主要な用法であるか判断が困難な事例もあった（全体の12％程度）。また，数例であるが，重層的というよりも，いずれの用法とも解釈しうる，あいまいな（ambiguous）の事例もあった。これらの事例は，4節で諸用法を集計する際に，主要な単独用法での使用例とは別の方法で集計することになるが，以下に，その用例を一部例示する。

(17) では，画家は，死に瀕した父親の肖像画を描いてほしいと依頼されるが，今は忙しくて描いてやることはできないと伝えている。しかし，弟子が代わりに描いてあげられることを思い立ち,「ちょっと待ちたまえ」と，弟子の住所を手渡す場面である。“Stay”は [5]「思いついて」用いられているが，住所を教えるので「少しそのまま待って」という [1] の意味合いも存在し，しかも，ここではそのいずれが優勢であるかを明確に判断するのは困難かと思われる。本稿ではこのような事例は用法の重層的な使用例として分類した。（以下，例えば用法 [1] と [5] の重層的な使用を [1] + [5] のように表す。）

(17) [1] + [5]
‘It grieves me to refuse you, my dear; but you know that my battle-piece, which is destined for Versailles, must be sent to the Louvre in a fortnight, for I cannot miss the Exposition this year. But **stay**, my little friend, I will give you the address of several of my pupils: tell them I sent you, and you will certainly find some one of them who will do what you wish. Good-morning, Henry!’
（CLMET P3, Nesbit, *Five Children and It*）

(18) ではStopが用いられているが，この“stop”にも，会話中に父親が来るのに気づいて述べている [5] と「そのままここで少し待って」の [1] の意味が重なっているであろう。

(18) [1] + [5]

“Oh, dear, what am I to do!” exclaimed Erica. “I can't remember that you are one of them! you are so very unlike most.”

“I think,” said Charles Osmond, “you have come across some very bad specimens.”

Erica in her heart considered her visitor as the exception which proved the rule; but, not wishing to be caught tripping again, she resolved to say no more upon the subject.

“Let us talk of something else,” she said.

“Something nicer?” said Charles Osmond, with a little mischievous twinkle in his eyes.

“Safer,” said Erica, laughing. “But **stop**, I hear my father.”

She went out into the passage to meet him. (CLMET P3, Lyall, *We Two, a Novel*)

(19) のWaitにはSophyが部屋から出て行こうとするのを引き留める効果 [2] と，Sophyはすでにかぎが掛かっていてドアのところに留まっていることから，彼女の性急さをたしなめ，彼女に話し続けるために，彼女をそこで少し待たせる，留まらせる効果 [1] が重なり合っていると思われる。

(19) [1] + [2]

SOPHY. . . . Oh, I won't tell on you! I promise I won't, if you'll only let me go! I will hold my tongue about you and the Duchess! I take my solemn oath I'll hold my tongue!

QUEX. [*Rising.*] Ha! [*Calmly.*] No, my dear Sophy, I wasn't aware that your *fiance* is in the house. So the situation comes home to you a little more poignantly now, does it?

SOPHY. [*Rising and going to the passage-door.*] Unlock the door! where's the key?

QUEX. **Wait, wait, wait!** And you're going to keep your mouth shut after all, are you?

SOPHY. [*Rattling the door-handle.*] Yes, yes, Unlock it!

QUEX. Don't be in such a hurry. (CLMET P3, Pinero, *The Gay Lord Quex*)

(20) では，「行って彼女に話してほしい」と述べたころで，「ただし，私の名前を出さないでほしい」と依頼している。この“stay”には，彼女のところへと行くであろう相手を引き留める効果 [2] と，一方では，急に別の考えが浮かんで用いられた部分 [5] もあるだろう。

(20) [2] + [5]

I pray you, sir, since you are a clergyman (I recollect your face, and I recollect

Jane said you had been good to her), —pray you go and say a few words over her. But **stay**, —don't bring in my name; you understand. I don't wish God to recollect that there lives such a man as he who now addresses you.

(CLMET P2, Lytton, *Eugene Aram*)

Holdが用法[3]の，特に「発言の阻止」の効果をもつ場合は，[4]の「異議を唱える，抗議する」意味合いがしばしば感じられることを用例(12a, b)でみた。それでも，(12a, b)では[3]が主要であるので，それらは[3]の用例に含めた。(21)は主人に仕えるPamelaが両親に送る書簡の形で話が展開する小説からで、ここでは、新調した服を着て見違えるようなPamela (*I*)に、主人(*He*)が興奮すると同時におそらくからかわれたと感じたか、彼女のことを罵っている。これに対してPamelaは主人の独りよがりの言い方に耐えかねて，抗議の意を込めてその言葉を遮っている場面であると想像される。("I was out of Patience" とある。) この場面では，(12a, b)に比べて，"Hold"に抗議の意がより前面に出ていると考えられ，この"Hold"は[3]と[4]の重層的な使用例として分類した。

(21) [3] + [4]

He talk'd a good deal to Mrs. *Jervis*, and at last order'd me to come in to him. Come in, said he, you little Villain! for so he call'd me; good Sirs! what a Name was there! Who is it you put your Tricks upon? I was resolved never to honour your Unworthines, said he, with so much Notice again; and so you must disguise yourself, to attract me, and yet pretend, like an Hypocrite as you are—

I was out of Patience, then; **Hold**, good Sir, said I; don't impure Disguise and Hypocrisy to me, above all things; for I hate them both, mean as I am I have put on no Disguise. (CLMET P1, Richardson, *Pamela*)

以上，いずれが主要であるか判断が困難な2つの用法が，重層的に具現している事例をみてきたが，重層的に用いられているのではなく，いずれの用法で用いられているか，あいまいな事例が全4期でStayに2例，Holdに1例みられた。これらは4動詞の用法の相違や競合を明らかにすることを意図した集計には含めないが，このタイプの用例を1例のみ参考に示す。(22)では，「芝居を見たことはないのでしょ。」と尋ねられたFranklinが"Never"と答えている。これに対してCorkscrewが芝居に連れて行ってあげようと言うが，「でも，お金を持っていないね。」と言われ，Franklinはため息をつく。それに対して，Corkscrewは「でも，待てよ (But stay)」と打開策を提案している。このStayは[4]のattention-getter，あるいは，案が浮かんで述べている[5]の用法のどちらにも解釈できると考えられる。

(22) "Never," said Franklin, and felt, he did not know why, a little ashamed; and he longed extremely to go to one. "How should you like to go to the play with me tomorrow," said Corkscrew. "Oh," exclaimed Franklin, "I should like it exceedingly."— "And do you think mistress would let you if I asked."—"I think—may be she would, if Mrs. Pemfret asked her."—"But then you have no money,

have you?"—"No," said Franklin, sighing. "But **stay**, said Corkscrew, "what I am thinking of is, that if mistress will let you go, I'll treat you myself, rather than that you should be disappointed." (CLMET P2, Edgeworth, *The Parent's Assistant*)

4. 指示的な「待て」を表すStay, Hold, StopとWaitの用法の相違と競合

3節では，指示的な「待て」を表すStay, Hold, StopとWaitに共通してみられる5つの用法を設定し，その内容を実例で説明してきた。本節では，4動詞の諸例をその5つの用法に分類・集計した結果，どのようなことが明らかになるかをみていく。[12] 具体的には，4.1で，一見，似ている指示的な「待て」を表すStayとHoldの相違と役割分担，4.2でStayとHoldが後期近代英語期においてStop，そしてWaitへと取って代わられていく様子を詳しくみていく。

4.1 命令法で「待て」を表すStayとHoldの相違と役割分担

本節では，命令法で「待て」を表すStayとHoldの諸例を前節でみた5つの用法に分類することで，StayとHoldの相違と競合関係について明らかになる点をみる。集計結果を提示する前に，集計方法について2点確認しておく。ひとつは，これはすでに部分的に触れたが，本調査では，単独のStay, Hold, Stop, Waitだけではなく，[(do) pray/please Stay/Hold/Stop/Wait (for/but) a minute/moment/second/a littleの類義語/there/now]の形式を該当例としたが，Stay/Hold/Stop/Waitの後にuntil節等が続く用例は対象外とした。基本的に，(指示的な)「(ちょっと)待て」に相当する英語表現を調査対象としたということである。

2点目は，Stay等の4動詞は，(2c)の"Stay, stay"，(12b)の"Hold, hold"，(19)の"Wait, wait, wait!"ように，連続して用いられることが時にあるが，これらの事例は2, 3例ではなく，1例として集計した。また，(12a)では，2つのStayに間に直接話法の長い伝達部が介在しているが，実際の発話としては，Stayは連続して使用されていると解釈されるので，このような事例も1例として集計した。また，連続ではなくとも，(23)のように，お互いにごく近接して用いられた事例も1例として集計した。

(23) a. Faulk. In Tears! **stay**, Julia: **stay but for a moment**.
(CLMET P1, Sheridan, *The Rivals*)

b. I pursue you not, Madam—I will try your generosity. **Stop**—return—this moment **stop**, return, if, Madam, you would not make me desperate.
(CLMET P1, Richardson, *Clarissa*)

(12) 本調査のように，用例を意味・用法別に分類する作業には分析者の主観が交じることが，この種の分析者自身からも指摘されることがしばしばある。注10で触れたNesselhauf (2012)もその一例であるが，本調査でも，Nesselhaufが行ったように，用法を特定するに当たりなるべく広い文脈を参照するよう心掛けた。また，元論文に対するご指摘を受けて，異なる用法が重層的に使用されている可能性を念頭に置きつつ，4動詞のすべての用例について，その用法の分類を再検討した。その見直し作業の段階で，用法の判定を変えた用例も時にあったが，結果的に，4動詞の5用法間の分布の型は，当初の集計結果とかなり近いものとなった。

ただし，次にように，異なる語が隣接して使用されている場合は，それぞれ1つ例ずつとして集計した。

(24) Good-night, my Lord.
［Going.
EDWARD. **Hold!** O **stay**, Gondibert!　(CLMET P1, Cowley, *Ablina, Countess Raimond*)

さて，表2は，調査対象の第1期から第4期において，それぞれStayとHoldの該当例が[1]から[5]の5用法の内のいずれかひとつの用法で（主に）用いられたもの（「単独主用法」），いずれが主要とは判断できない2つの用法が重層的に認められるもの（「重層的使用」），あいまいなもの，その用法の判断が困難なもの（「用法不明」）とに分類した集計表である。表の件数はそれぞれの時期のサブコーパスにて検索された出現件数を示している。なお，本稿では，表中の空欄は該当例なし（0例）を表すものとする。

表2 StayとHoldの該当例の用法別分布[13]
Stay

単独主用法	1640-1709	1710-1779	1780-1849	1850-1920
[1]「そのまま少し待って」	11	25	15	7
[2] 引き留め	23	42	70	11
[3] 行為・発言の阻止	2	3	10	2
[4] 異議を唱えて、attention-getter			6	4
[5] 気づいて・思いついて・思い出して	7	18	29	13
単独主用法例合計	43	88	130	37
重層的使用 [x + y]				
1+2	3	1	3	2
1+3		1		
1+4	1			
1+5	4	3	4	6
2+3			1	
2+5		3	7	4
3+4	1	1	1	1
3+5	1			2
4+5				1
重層的使用例合計	10	9	16	16
あいまい			2	
用法不明		4	1	2
総計	53	101	149	55

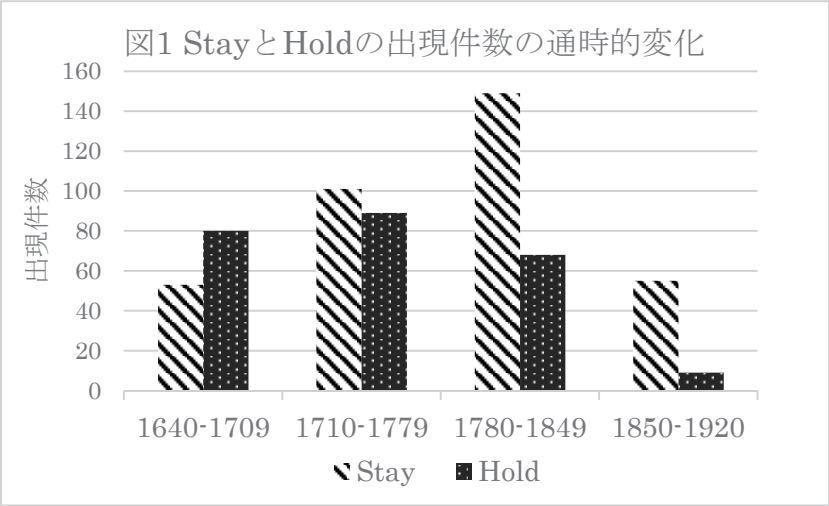
(13) 第1期（1640–1709）のStayとHoldの該当例の内，表1に示した「作品群」から得られた用例の件数は，以下に示す通りである。

追加作品名	stay	hold
Bahn, *The Rover*	8	2
Brome, *A Jovial Crew*	4	9
Brome, *The Court Beggar*	1	7
Bunyan, *Pilgrim's Progress*, Part 1	3	6
Congreve, *Love for Love*	1	9
Dryden, *Marriage a la Mode*	4	3
Wycherley, *The Country Wife*, Act 1, 3, 4	9	14
合計件数	30	50

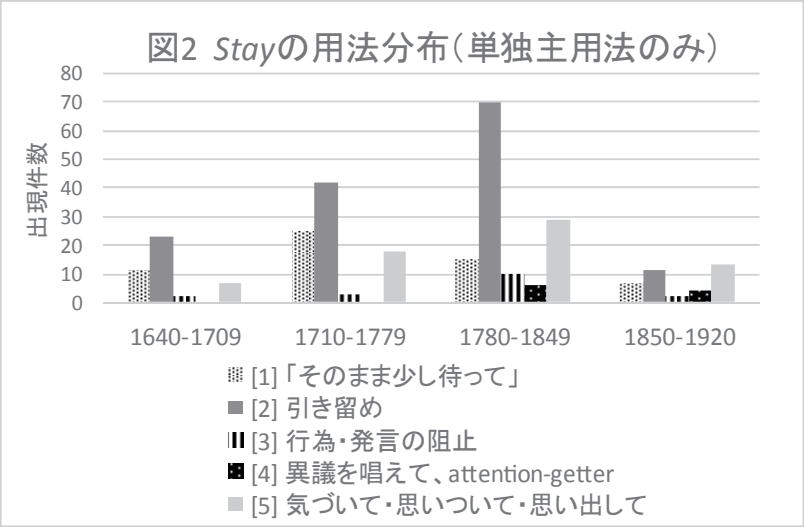
Hold

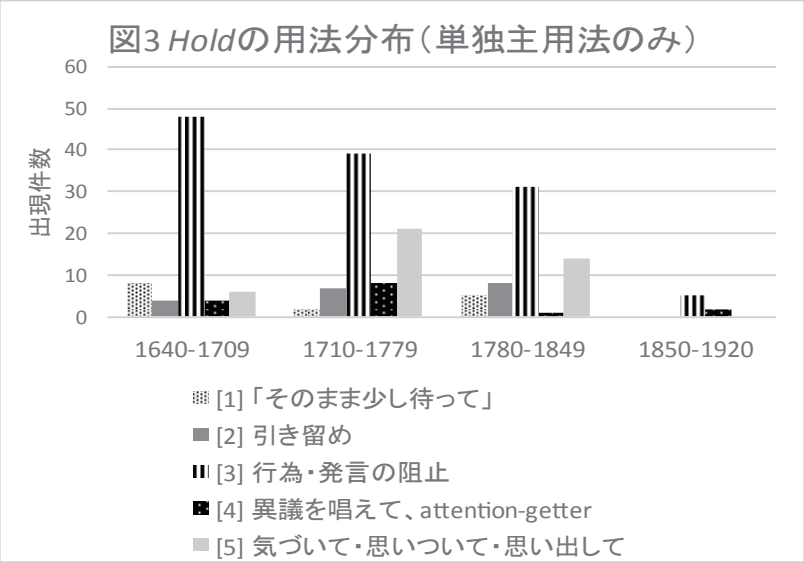
単独主用法	1640-1709	1710-1779	1780-1849	1850-1920
[1]「そのまま少し待って」	8	2	5	
[2] 引き留め	4	7	8	
[3] 行為・発言の阻止	48	39	31	5
[4] 異議を唱えて、attention-getter	4	8	1	2
[5] 気づいて・思いついて・思い出して	6	21	14	
単独主用法例合計	70	77	59	7
重層的使用 [x + y]				
1+2			1	
1+3	4	1	2	1
1+4	2			
1+5		1		
3+4	1	6	4	
3+5	2	3		
重層的使用例合計	9	11	7	1
あいまい			1	
用法不明	1	1	1	1
総計	80	89	68	9

まず，Stay と Hold の該当例の総件数の通時的推移を図1にみてみよう。2.1で紹介したように，2期から4期はCLMETをコーパスに用いているのに対して，第1期の1640–1701は別のコーパス・データを用いている。したがって，とりわけ第1期からそれ以降にかけての部分は単純な頻度の比較はできない。しかし，Stay と Hold の相対的な頻度の変化は比較可能である。図1によれば，第1期から2期では Stay と Hold はおおよそ大差なく使われているが，3期以降，Hold は Stay に比べて急速に頻度を落としていく様子がうかがえる。



次に，Stay と Hold が用いられる用法の相違を図2と図3にみてみよう。重層的に用いられた用例をも図に盛り込むと図が煩雑になり，また，その用例は単独の主用法で用いられた用例（表2の「単独主用法例合計」）と比較して多くはないので，ここでは重層的使用の事例は除き，後者の件数のみを図にする。(14)





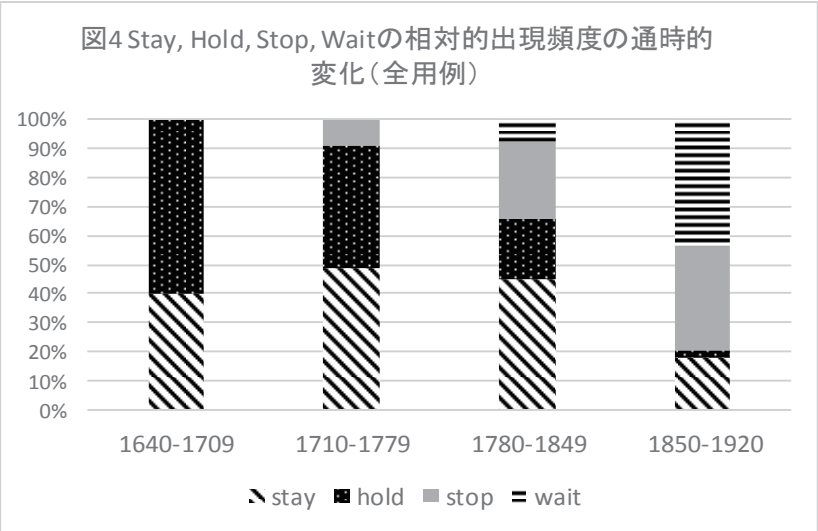
(14) 重層的使用例は，4.2で4動詞の通時的な競合を用法別に考察する際に，単独主用法例と合算して集計に含めるところがある。

図2，3では，StayもHoldも，異なる時期で用いられる用法の分布に幾分の違いはみられるが，そこには通時的に大まかに共通する分布の型も見て取れる。つまり，Stayでは，用法［2］が目立ち，［1］と［5］もまずまずあるが，ただし，この分布の型は第4期においてはやや異なる。一方，Holdでは用法［3］が目立ち，その他は［5］もある程度みられる。

2.1にて，*OED2*の語義記述によれば，Stayには本稿での用法［1］「そのまま少し待って」，［2］「引き留め」と［3］「行為・発言の阻止」の用法が，一方，Holdには用法［3］が存在することが示唆されることをすでに検討し，この示唆はStayとHoldの違いをある程度言い当てているとした。確かに，Stayでは［2］が優勢で，［1］もまずまずみられるので，この2点は*OED2*の記述と整合する。Holdでは用法［3］が最多であるので，大方のところではHoldの特徴を言い当てている。しかし，図2と3からはそれ以上のことが示唆される。まず，図2によれば，Stayでは［1］，［2］，［3］の中でも［2］の「引き留め」の用法が際立ち，*OED2*に記載のあった［3］は実は少ないことが分かる。また，Stayに多い用法［2］はHoldに少なく，逆にStayに少ない用法［3］はHoldでは際立ち，StayとHoldとの競合を考えれば，用法［2］はStay，［3］はHoldという，一種の役割分担とも言える構図が浮かび上がる。このStayとHoldとの役割分担については，4.2で5用法が4動詞のいずれによって担われてきたかを吟味する際に再確認するが，この役割分担は*OED2*の記述からはみえてこない。さらに，*OED2*の記述になかった用法［5］はStay，Hold双方におおむね等しくみられ，用法［4］は，おそらくその用法が［3］の，とりわけ発言の阻止の効果としばしば関連があることから，Holdの方により多くみられることが判明する。

4.2 Stay，Hold，StopとWaitの通時的競合と交替

本節では，Stay，Hold，StopとWaitの通時的な競合と交替の様子を吟味する。図4はコーパスで検索された，命令法で「待て」を表す4動詞の全用例数（用法不明例を含む）の通時的な変化を，100%積み上げ棒グラフで表したものである。



これをみると，おおむね，第1期と2期ではStayとHoldが競合し，その後，Stop，遅れてWaitがStayとHoldに取って代わる様子がうかがえる。しかし，本節では，4動詞の競合を3節でみてきた「待て」を表す5つの用法ごとに調査することで，4動詞の競合と交替の実態をよりよく理解できることをみていく。

4.2.1 StopとWaitの用法分布

4動詞の競合を5つの用法ごとに観察するために，まずは，StayとHoldと同様に，StopとWaitの用例を5用法に分類・集計した結果を提示する必要がある。ただし，その結果を提示する前に，Stopの用例収集にあたり該当例から外した用例が多少あり，それについて触れておく。まず，Stopの用例には，(25) のように，「馬車・馬を止めろ」という意味で用いられているものが複数みられた。これは用法 [2] に似ているが，[2] は「去って行こうとする人を引き留める，進行中の人を引き留める」用法で，それとはやや異なる。また，コーパスでは他の3動詞にこの用法の事例は観察されなかったことから，該当例から除外した。

(25) . . . The next coach that
came was the mail; it was going very fast, being rather down the hill; and, as the glare came suddenly upon them, the coachman had some difficulty in pulling up his horses till they got rather beyond the front of the cottage. I was just coming out of the garden, and as it was dark, I heard, unseen, but very distinctly, the following dialogue: "Aye, aye, coachman, **stop**, by G-d! tell me whose house this is?"—"It is Middleton Cottage, Sir, the residence of Mr. Hunt."
(CLMET P2, Hunt, *Memoirs of Henry Hunt*)

また，(26) は単発的な事例ではあるが，ギリシャ語の詩文の一節に感動し，読み進められてなくなっている生徒に対して，教師が「ちょっと読むのを休んで」と言葉をかけている場面である。このStopは相手の利益になる言葉で，一般的な「行為の阻止」とは性質が異なるので該当例から除外した。

(26) The master looks puzzled for a moment, and then seeing, as the fact is, that the boy is really affected to tears by the most touching thing in Homer, perhaps in all profane poetry put together, steps up to him and lays his hand kindly on his shoulder, saying, "Never mind, my little man, you've construed very well. **Stop a minute**, there's no hurry." (CLMET P3, Hughes, *Tom Brown's Schoolday*)

さて，StopとWaitの用例を，5用法の内のいずれかひとつで（主に）用いられたもの（「単独主用法」），2つの用法が重層的に用いられているもの（「重層的使用」），そしてその用法が不明なものとに分類・集計したものが表3である。[15]

(15) StopとWaitにはあいまいに使用されている用例はみられなかった。

Stop も Wait もそれぞれ最初に用例が観察された時期から急速に頻度を伸ばしているが，Stay（図2）と Hold（図3）と同様に，それぞれ単独使用での用法の分布を図で示したものが，図5と図6である。

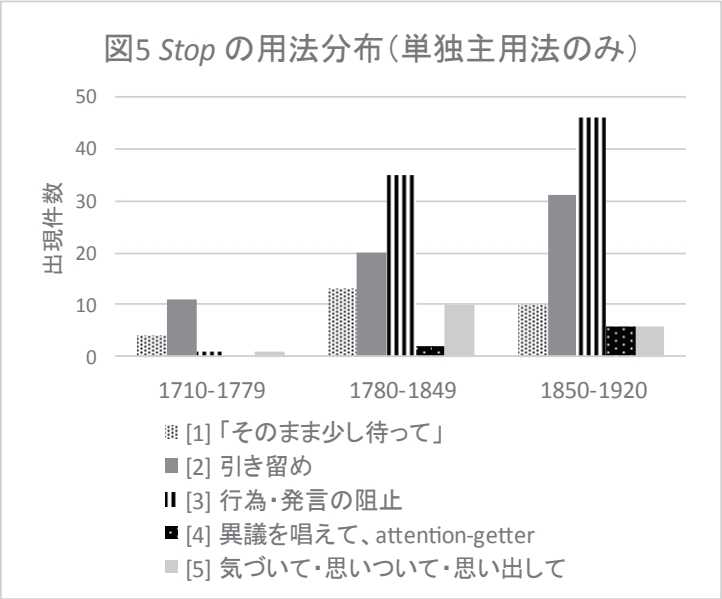
表3 StopとWaitの該当例の用法分布

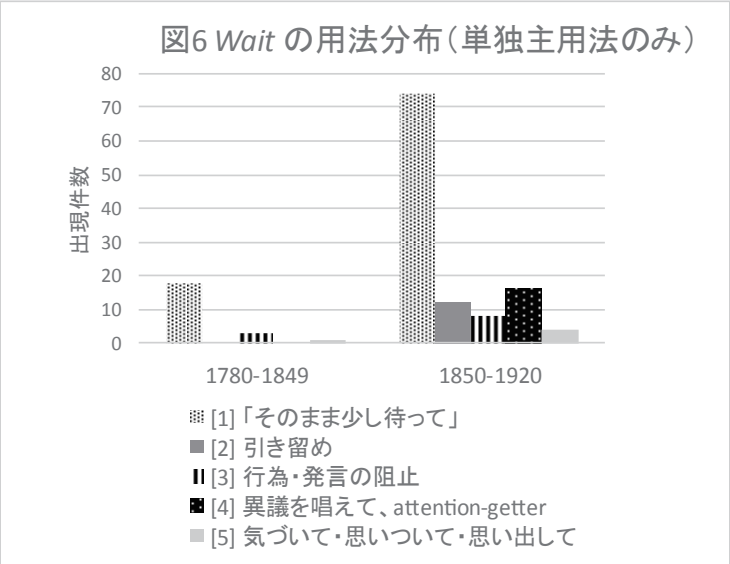
Stop

単独主用法	1710-1779	1780-1849	1850-1920
[1]「そのまま少し待って」	4	13	10
[2] 引き留め	11	20	31
[3] 行為・発言の阻止	1	35	46
[4] 異議を唱えて、attention-getter		2	6
[5] 気づいて・思いついて・思い出して	1	10	6
単独主用法例合計	17	80	99
重層的使用 [x + y]			
1+2		3	1
1+3	1	1	1
1+4			1
1+5			2
2+5			1
3+4		1	2
3+5			1
重層的使用例合計	1	5	9
用法不明		2	2
総計	18	87	110

Wait

単独主用法	1780-1849	1850-1920
[1]「そのまま少し待って」	18	74
[2] 引き留め		12
[3] 行為・発言の阻止	3	8
[4] 異議を唱えて、attention-getter		16
[5] 気づいて・思いついて・思い出して	1	4
単独主用法例合計	22	114
重層的使用 [x + y]		
1+2		6
1+3	2	2
1+4		1
1+5		5
2+5	1	
3+4		1
重層的使用例合計	3	15
用法不明	1	6
総計	26	135





OED2 の stop の語義記述を読むと，Stop は用法［2］「引き留め」と［3］「行為・発言の阻止」の２用法で用いられる，と推測されたが，この推測は図５の Stop の用法分布とまずまず合致している。また，Wait については，*OED2* の wait の語義には用法［1］に相当するものしか見当たらなかったが，図６の Wait の調査結果では用法［1］が際立ち，これも大方実態に

符合する。[16]

一方で，StopとStay，Holdとの関連では，Stayには用法［2］と用法［3］に相当する語義記述がみられたが，Holdには用法［3］に相当する語義記述のみがみられた。Stopには用法［2］と［3］に関わる記載があることから，StopはHoldよりもStayに近いと予測される。しかし，図2でみたように，Stayには用法［3］は相対的に少ない一方で，Stopの出現件数がある程度に達する第3期以降のStopでは，用法［3］の件数が最多で，この点ではStopはStayよりもむしろHoldの分布（図3参照）により似ている。しかし，他方で，StopにはHoldでは希少であった用法［2］も目立ち，この点はStayに似ていることが判明する。つまり，［3］が最多である点で，Stopの用法は基本的にはStayよりもHoldのそれにより近いと思われるが，それはまたStayとも共通点をもつと言える。

4. 2. 2 Stay，Hold，StopとWaitの通時的競合と交替

前節にてStopとWaitの用法分布を観察したことで，Stay，Hold，StopとWaitの4動詞の通時的な競合と交替を用法別に観察する準備がほぼ整った。ある語彙がどのような用法で用いられる傾向があったかは，語彙とその意味の対応を明らかにすること（意味論でいうsemasiology）で，これまではこの関係をみてきた。以下では，ある特定の意味，本調査では「待て」の5つの意味・用法が，どのような語彙によって表される傾向があったかを調査することになる（onomasiology）。[17] ただし，近代英語期にも「待て」に相当する意味を部分的に表す表現は，Stay，Hold，StopとWaitの4動詞以外にも存在した。そこで，「待て」を表す語彙の競合をより包括的に考察することを念頭に，それらもなるべく含めて競合の様子を観察してみることにしよう。「待て」の諸用法に相当し，4動詞と部分的に競合すると考えられる動詞（句）は主に*HTOED*の概念リストを参照し，20ほどの語彙項目について検索を試行した。結果として，次のような表現が該当例として抽出された。以下，それらをアルファベット順に提示する。

Cease: 1710–1779に7例；1780–1849に6例〔すべて用法［3］〕
Drop it: 1850–1920に2例〔2例とも用法［3］〕
Halt: 1710–1779に1例〔用法［2］〕; 1780–1849に2例〔用法［2］—1例，用法［5］—1例〕
Hold on: 1850–1920に10例〔用法［1］—1例，用法［3］—5例，用法［5］—1例，［3］+［4］の重層的使用—2例，不明—1例〕
Just a minute: 1850–1920に2例〔用法［1］—1例，用法［2］—1例〕

---

(16) Waitは第2期では用法［1］が用例の81.8%を占めていたが，第3期ではそれは64.9%と減少し，その他の用法の比率が増加している。第2期では単独使用での用例数が22例と件数が少なく（表3の「単独主用法例合計」参照），この［1］以外の用法の相対的な増加は十分な信頼性に欠けるかもしれない。しかしながら，現代イギリス英語について，1985年から1993年の間に出版されたBNCのFictionのProseとDramaのサブコーパスを対象に，Waitの用例を同じ基準で調査したところ，用法［1］が全体に占める割合は27.8%とさらに低くなっていた。言い換えれば，文字通りの用法［1］に対する他の用法－これは拡張的な用法と言えるかもしれない－が増加していることになる。この増加は他のコーパスでも確認されるのか，またそうだとすると，どのような捉え方ができるのか等，興味深いが，このテーマについては稿を改めて論じたい。

(17) Jacob and Jucker（1995）は，特定の意味が通時的にどのような形式に対応していたかを照合することをdiachronic function-to-form mappingと呼んでいる。

Leave off: 1850–1920に1例〔用法［3］〕
Stand: 1710–1779に1例〔用法［2］〕; 1780–1849に2例〔2例とも用法［2］〕;
　　1850–1920に1例〔用法［2］〕
Stop it/that: 1780–1849に3例〔すべて用法［3］〕; 1850–1920に2例〔2例とも用法［3］〕

これらの表現は，本稿で考察の対象としている，Stay，Hold，Stop，Waitと比べていずれも数は少なく，また，複数の用法にまたがる事例が観察されたものは，Hold on，Just a minuteとHaltのみであった。残りのCease，Drop it，Leave off，Stop it/thatは用法［3］「行為・発言の阻止」のみで，Standは用法［2］「引き留め」のみで用いられていた。その意味ではこれらの表現は，［1］から［5］の用法をもつStay他の4動詞の厳密な意味での競合形とは言えないかもしれない。また，件数も少ない。そこで，これらの表現は後の集計表では「その他」として一括して提示する。以下，これらの表現の実例とその除外例を数例示す。また，除外した関連表現についても簡潔に触れておく。

まず，Ceaseの用例を1例挙げる。(27) では失恋し，彼女がいるこの町から出ていきたいと述べる男を慰めようとしたのに対して，今は放っておいて欲しい，と男が述べているくだりである。(27) のCeaseは用法［3］の「発言の阻止」の効果をもつであろう。

(27) “Let us never return to this subject again: it is right that I should conquer this madness, and conquer it I will! Now you know my weakness, you will indulge it. My cure, cannot commence until I can no longer see from my casements the very roof that shelters the affianced bride of another.”
“Certainly, then, we will set off to-morrow: my friend! is it indeed—
“Ah, **cease**,” interrupted the proud man; “no compassion, I implore: give me but time and silence, —they are the only remedies.”
（CLMET P2, Lytton, *Alice or the Mysteries*）

次に，haltの該当例と除外例についてそれぞれ触れておく。まず，(28) では，Sir Sim［Simon］の息子のCaptainの結婚が決まり，めでたい雰囲気でその場を一同去るところを（直前のト書きに“Going.”とある），Puffが引き留めて，異議を述べる場面である。このHaltの主要な機能は用法［1］「引き留め」と考えてよいだろう。

(28) Sir Sim. Bob, I wish you Joy! This is News indeed! And when we celebrate your Wedding, Son, I’ll drink a half Pint Bumper myself to your Benefactor.
Capt. And he deserves it, Sir; such a General, by his Example and Justice, animates us to Deeds of Glory, and insures us Conquest.
Sir Sim. Right, my Boy. Come along then.
［Going.
Puff. **Halt a little**, Gentlemen and Ladies, if you please: Every Body here seems well satisfy’d but myself.
Capt. What’s the Matter, Puff?　（CLMET P1, David Garrick, *Miss in Her Teens*）

一方，Haltには，“**Halt!** Four outside: two in with me.”（CLMET P2）のように軍隊用語として用いられた事例（*OED2*, s.v. *halt*, *v.*[2] 1. bを参照）がみられたが，これは通常の「引き留め」とは異なる特殊な用法であるので，除外した。また，“Weather warm, your honour—horses knocked up—next town far as hell!—**halt a bit** here—augh!”（CLMET P2）の“halt”は「旅の途中で休む」（*OED2*, s.v. *halt*, *v.*[2] 1. a *intr.* To make a halt; to make a temporary stoppage in a march or journey（下線は筆者）を参照）の意味で，本稿で扱っている5用法とは異なり，除外した。

Standは*OED2*の定義，In *imper.*, a command to come to a haltにあるように，去って行こうとする者を引き留めるのではなく，すでに進行中の者を引き留めるのに用いられる。Stay等の4動詞では，前者の用法が多いが，後者にも使われるので，用法［2］の競合のセットに入れた。1例用例を挙げよう。(29) では，人気のない通りで家族のために通行人から物を取ろうとしている「私」が，ある通行人に近寄って「待て，これ以上進むな」と述べている場面である。

(29) I perceived a Man advancing, at some Distance. I hastened to meet him, and, coming within a few Paces, **stand!** I cried, pass no further!
（CLMET P1, Brooke, *The Fool of Quality*）

次に，本稿ではJust a minute/moment/second/a bit/a littleは調査対象としたが，One moment/minuteの類は対象から外した。用例が最も多いOne momentを取り上げ，その理由を簡潔に述べる。第3期（CLMET P2）では，one momentがStay等に連結して使われる用例は，stay one momentが4例，stop one momentが2例に対して，「待て」の意味で単独で使用されているOne momentは1例であった。それが，第4期では，wait one momentが3例，hold one momentが1例に対して，「待て」を表す単独のOne momentは34例みられ，こちらの形式が圧倒的に多くなる。この状況は，本来はStay/Hold/Stop/Wait + one momentの表現であったものが，繰り返しの使用を経て，Stay等の動詞が省略されて用いられようになった結果と解釈できるように思える。[18] 34例のOne momentでは用法［1］が最多で，用法［2］，［3］と［4］がまずまずあるが，この用法の分布は，One momentでは用法［5］が希少であることを除いては，同時期の4動詞を合わせた全体的な用法の分布状況とおおむね似ている。このことからも，One momentはStay/Hold/Stop/Wait + one momentの省略形と捉えるのが妥当ではないかと考えられる。すると，このOne momentは4動詞との競合のセットに含める意味はなく，むしろそれを加えることで，4動詞・その他の競合関係の構図をぼかすものと考えられ，調査から除外した。数はずっと少ないが，同様のことがOne minuteについても言える。また，One secondの単独使用の該当例はなかった。

一方，第4期に2例のみではあるが，Just a minuteは該当例に含めたのは，第3期，第4期ともにStay等＋ just a minuteはないところで，第4期にJust a minuteの単独使用が現れていること，Just a minute/moment/secondは複数の現代英語の英英辞典で「待て」の

(18) Biber and Finegan (2001) は18世紀以降，戯曲，小説，書簡，日記といった通俗的，一般的ジャンルにおいて，「口語的（oral）」特徴がよりみられるようになることを指摘している。Stay等の動詞が省略された形式が多くみられるようになる背景には，こうした事情も関わっているかもしれない。

諸用法を表す定型表現・イディオムとして扱われていることによる。[19]

最後に，Stop it/thatをStopとは別に集計し，また，該当例から外したものもあることについて触れておく必要があるだろう。まず別集計としたのは，Stop it/thatとStopには違いがあると考えられることによる。例えば，Stopは「発話の阻止」でもよく用いられるが，stop it/thatの用例はそのほとんどが「行為の阻止」に用いられ，「発話の阻止」はまれであった。また，Stopはこれから行われようとする行為の阻止にも，すでに行われている行為の阻止にも用いられるのに対して，Stop it/thatは後者に対してのみ用いられる。[20]すると，両者は，通例，すでに行われている行為を阻止する効果で競合関係にあるわけだが，その場合もStop it/that はStopと異なる事態を表すことがあるように思われる。そうした事例は本調査では数例ではあったが，それらは除外した。例として，(30) のstop itの用法を検討してみよう。(30) では，Rebbecca他ふたりの女性がDobbinに手を差し伸べて挨拶をしようとしたところ，彼は "it is not as your friend that I am come here now." と述べる。それを聞いたJosが「そんな態度は止めてもらいたい。」と不快感をあらわにして訴える場面である。単独のStopそしてStay, Waitは，基本的に当該の行為を一時的に遮る，阻止しようするのに用いられるのに対して，このStop itは一時的にある行為を遮ると言うよりも，当該の行為を完全にやめさせる効果をもつと考えられる。このタイプのStop it/thatは，本稿で対象としている，基本的に一時的にある行為を遮ろうとする「行為の阻止」とは若干異なると判断し，除外した。

(30) Rebecca, too, was in the room, and advanced to meet him with a smile and an extended hand. Dobbin drew back rather confusedly, "I—I beg your pardon, m'am," he said; "but I am bound to tell you that it is not as your friend that I am come here now."
"Pooh! damn; don't let us have this sort of thing!" Jos cried out, alarmed, and anxious to get rid of a scene.
"I wonder what Major Dobbin has to say against Rebecca?" Amelia said in a low, clear voice with a slight quiver in it, and a very determined look about the eyes.
"I will not have this sort of thing in my house," Jos again interposed. "I say I will not have it; and Dobbin, I beg, sir, **you'll stop it.**" And he looked round, trembling and turning very red, and gave a great puff, and made for his door.
(CLMET P2, Thackeray, *Vanity Fair*)

さて，ここまで，4動詞の通時的な競合をより包括的な視野から調査するために，「待て」の5用法のいずれかの用法で用いられ，それゆえ，4動詞との競合のセットに含める諸表現を紹介してきた。これらの諸表現は，既述の通り，それぞれ件数が少なく，特定の用法に偏る傾向があるので，一括して「その他」として扱う。表4は，用法 [1] から [5] について，当

(19) 一方で，One momentは「待て」以外の意味でも使われるためか（例えば，Let me talk to you one moment.の略など），定型表現・イディオムとして扱われていないようである。

(20) *MED2*には，Stop itについて*spoken* used for telling someone not to do something that they are doing（s. v. *stop*[1], Phrases）という記述がみられる。

該の意味・用法で用いられた4動詞と「その他」の表現の，4期の調査期間にわたる出現件数を示した集計表である。ただし，表4の件数は，表2及び表3で提示された，単独の（主）用法で用いられた用例と異なる2つの用法が重層的に用いられた用例の件数を合算したものを示している。合算に当たっては，重層的に用いられた用例は次のように計上した。例えば，あるStayの用例が用法［1］と［5］で重層的に使用されている場合，そのStayは用法［1］と［5］で使用されたものとして，それぞれに1件ずつ計上した。つまり，1例の重層的使用例は，2つの異なる用法に1件ずつ計上されている。この集計方法では，ある用法が単独で用いられた場合と他の用法と重層的に用いられた場合とが区別なく集計されることになる。しかし，ここではある意味を表すのに，異なる複数の形式の内，どの形式が用いられるかを知るのが目的であるので，この集計方法で問題はないと考えられる。(21)

表4 5用法を表す4動詞他の通時的な出現件数［単独(主)用法での使用例及び重層的使用例を合算］

［1］「そのまま少し待って」

	1640-1709	1710-1779	1780-1849	1850-1920
Stay	19	30	23	15
Hold	14	4	8	1
Stop		2	17	15
Wait			20	88
その他				2
	33	36	68	121

［2］引き留め

	1640-1709	1710-1779	1780-1849	1850-1920
Stay	26	46	81	17
Hold	7	7	8	0
Stop		4	23	33
Wait		0	1	18
その他		2	3	2
	33	59	116	70

［3］行為・発言の阻止

	1640-1709	1710-1779	1780-1849	1850-1920
Stay	4	5	12	5
Hold	55	49	37	6
Stop		12	37	50
Wait		0	5	11
その他		7	9	12
	59	73	100	84

［4］異議を唱えて，attention-getter

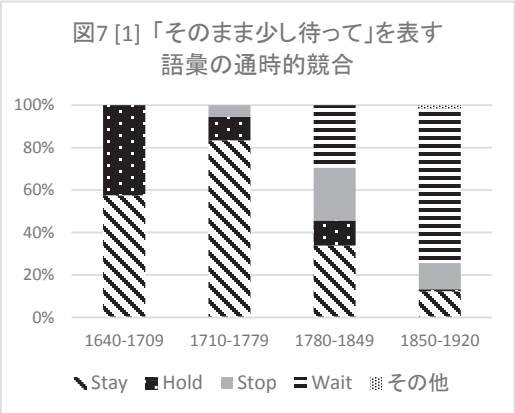
	1640-1709	1710-1779	1780-1849	1850-1920
Stay	2	1	8	6
Hold	7	15	5	2
Stop		1	3	9
Wait				18
その他				2
	9	17	16	37

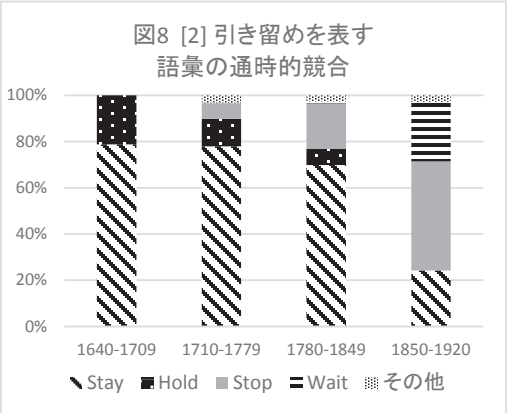
［5］気づいて，思いついて，思い出して

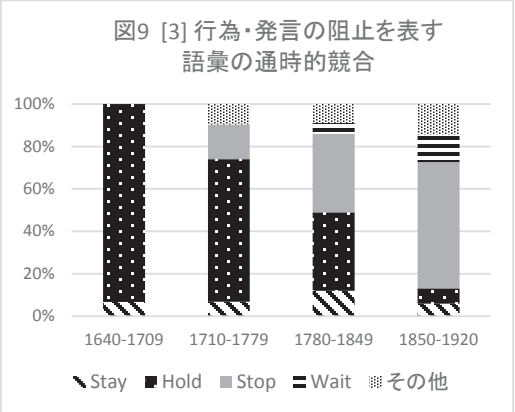
	1640-1709	1710-1779	1780-1849	1850-1920
Stay	12	24	40	26
Hold	8	25	14	
Stop			10	10
Wait			2	9
その他			1	1
	20	49	67	46

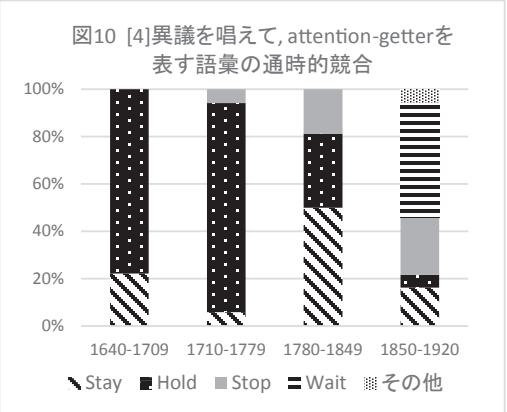
この用法［1］から［5］の出現件数の集計表を基に，それぞれの用法に観察された4動詞とその他の表現の相対的な比率を100%の積み上げ棒グラフにしたものが，図7から図11である。

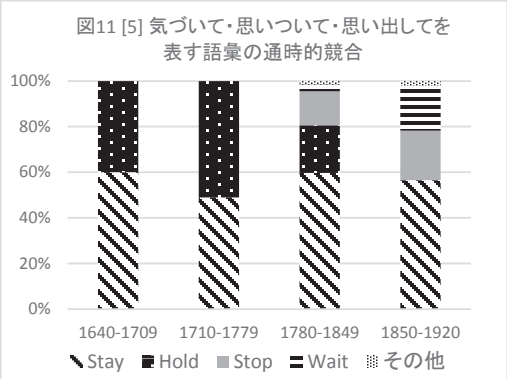
(21) この集計方法はNesselhauf（2012）に倣ったものである。注10で触れたように，Nesselhaufは，will，shall，be going to，be to等の（疑似）法助動詞及び進行形が，「未来についての予測（prediction）」，「意志（intention）」，「取り決め，予定（arrangement）」，「（You shall V等にみられる）話者の意図」のいずれの意味を表すかについては，単独または明らかにある主要な意味で用いられた用例の件数と2つの意味が重層的に用いられたものの件数とを別個に集計している。一方，特定の意味がどの形式によって表わされる傾向があるかを調査するに当たっては，単独の意味で用いられた事例と重層的に用いられた事例とを合算して集計している。











すでにStay，Hold，StopとWaitの4動詞の全体的な出現頻度の通時的な競合を図4でみた。そこでは，おおむね，第1期と2期ではStayとHoldが競合し，その後，第3期でStopが目立ち始め，4期でStopとWaitが競り合うという構図であった。しかし，4動詞の競合を用法別にみると，Waitが優勢であるのは，第4期においても，用法［1］（図7）と用法［4］（図10）においてであり，用法［2］（図8），［3］（図9）及び［5］（図11）では，Stopもしくは

Stayが優勢であることが判明する。Waitは第4期でも用法[1]がその該当例の約61%（単独（主）用法での使用と重層的使用例とを合算した値）を占めており（表3参照）），この時期では用法[2]や[3]ではStopの方がずっと優位であったことが分かる。見方を換えれば，図8と図9からは，Holdの主要な用法[3]も，Stayの主要な用法[2]も，（まずは）WaitよりもStopによってより取って代わられたことが判明する。とりわけ，用法[3]（図9）では，第2期から第4期にかけてHoldからStopへと急速に入れ替えが進行したことが読み取れる。一方，Stayは第3期まで，用法[2]で依然圧倒的によく用いられる選択肢であったことが分かる。また，Stayの通時的な用法分布を示した，4.1の図2によれば，Stayは第4期では，この用法[2]に代わって用法[5]が目立つが，図11をみると，Stayはこの時期，用法[5]で他の動詞ともよく競合していることが分かる。

この意味と形式の対応図はまた，4.1節で検討した，第1期と2期におけるStayとHoldの相違をより明確に現している。図8，9，10からは，Stopが本格的に競合に加わる以前の第1期と2期では，用法[2]は主にStayが（図8参照），用法[3]と[4]は主にHoldが担う（図9・10参照）という，役割分担とも言える関係が，図2と図3のStayとHoldの用法分布図の比較から推測するよりも，より直截にうかがえよう。また，用法[1]では，HoldよりもStayが用いられやすかったことも確認される。さらに，用法[5]ではStayとHoldは競合していたことも一見して読み取れる。

最後に，4動詞以外の競合形（「その他」の形式）について触れておくと，これらは調査対象の時期においては全体的に少ないことが確認される。用法[3]の第4期では，「その他」が占める比率が最も高いが，その12例中7例はhold on（単独使用5，重層的使用2）である。「その他」として挙げた表現以外に漏れているものもある可能性はあるが，現代英語で頻繁なhold onとJust a minuteは第4期でもまだ目立たず，hang onは検索されなかった。命令法で（指示的な）「待て」を表す表現にも，近代英語から現代英語にかけて大掛かりな語彙の交替があったと言える。

おわりに

本稿は，近代英語期において命令法で「待て」を表す4つの主要な動詞，Stay，Hold，Stop，Waitの用法上の相違とその通時的な競合について考察してきた。類義語，同様の機能をもつ語彙の通時的な競合と交替については多くの調査・研究がなされてきたが，本稿で扱った語彙については，身近な表現にもかかわらず，これまでその史的競合や交替が調査されることはなかったかと思われる。調査では，各種辞書の記述と実例の精査を通して，命令法で「待て」の意味で用いられた4つの動詞に5つの用法を認めた。そして，この4動詞の用法には，一見，違いはないように見えるが，それぞれ用いられる用法の傾向に相違があることが判明した。本調査での第1期（1640–1709年）と2期（1710–1779）では，StayとHoldに競合と同時に，「引き留め」の用法は主にStayが，「行為・発言の阻止」の用法は主にHoldが担うという，一種の役割分担もあったことが明らかになった。また，StayとHoldの競合を経て，Stop，さらにWaitへの交替についても，4動詞を中心とした交替を用法別に調査することで，4動詞の通時的交替は，異なる用法で異なる様相を呈することをみた。つまり，本調査の第4期（1850–1920年）では，単純な出現頻度ではWaitはStopをす

でに上回るが，この時期ではWaitの用法の6割以上は「そのまま少し待って」(wait for a short while) の用法で用いられたことから，この語義では確かにWaitが他を圧倒しているものの，「引き留め」や「行為・発言の阻止」の用法においては，StayとHoldは，WaitよりもStopに取って代わられたという事情が明らかになった。こうした点は，4動詞の競合を単にその全体的な出現頻度だけで調べたのでは分からない。結果的に，用法別に調査を行うことで，命令法で「待て」を表す動詞の通時的な競合や交替の実態がかなり明らかにされたではないかと思われる。

コーパス・データベース・作品出典

Behn, Aphra, *The Rover*: https://ebooks.adelaide.edu.au/b/behn/aphra/b42r/contents.html/

BNCweb: http://corpora.lancs.ac.uk/BNCweb/

Bunyan, John, *The Pilgrim's Progress, Part I*: http://www.gutenberg.org/files/131/131-h/131-h.htm/

A Corpus of English Dialogues 1560–1760: http://www.helsinki.fi/varieng/CoRD/corpora/ CED/

The Corpus of Late Modern English Texts, version 3.0: https://perswww.kuleuven.be/~u0044428/clmet3_0.htm

Dryden, John, *Marriage a la Mode*: http://www.gutenberg.org/files/15349/15349-h/15349-h.htm#page_231/

Eighteenth Century Collections Online-the Text Creation Partnership: http://quod.lib.umich.edu/e/ecco/

The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English, release 2（2016年4月よりrelease 3へ移行 cf. https://www.ling.upenn.edu/hist-corpora/PPCEME-RELEASE-3/index.html/）

Richard Brome Online: http://www.hrionline.ac.uk/brome/

Tydeman, William M.（ed.）（1976）*Three Restoration Comedies: The Man of Mode; The Country Wife; Love for Love*, Penguin Classics.

参考文献

Akimoto, Minoji（2000）"The grammaticalization of the verb 'pray'," in Olga Fischer, *et al*.（eds.）*Pathways of Change: Grammaticalization in English*, 67–84. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Akimoto, Minoji（2008）"Rivalry among the verbs of wanting," in Richard Dury, *et al.*（eds.）*English Historical Linguistics 2006 Vol. II: Lexical and Semantic Change*, 117–138. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Biber, Douglas and Edward Finegan（2001）"Diachronic relations among speech-based and written registers in English," in Conrad Susan *et al*.（eds.）*Variation in English:*

Multi-dimensional Studies, 66–83. Harlow: Longman.
Culpeper and Kytö (2010) *Early Modern English Dialogues: Spoken Interaction as Writing*, Cambridge: Cambridge University Press.
Finnell, Anne (1992) "The repertoire of topic changers in personal, intimate letters: A diachronic study of Osborne and Woolf," in Matti Rissanen *et al*. (eds.) *History of Englishes: New Methods and Interpretations in Historical Linguistics*, 720–735. Berlin: Mouton De Gruyter.
Fischer, Andreas (1997) "The *Oxford English Dictionary* on CD-ROM as a historical corpus: *To wed* and *to marry* revisited," in Udo Fries, *et al*. (eds.) *From Ælfric to The New York Times: Studies in English Corpus Linguistics*, 161–72. Amsterdam: Rodopi.
Iyeiri, Yoko (2014) "The shift from always to always in the history of English," in Yoko Iyeiri *et al*. (eds.) *Studies in Middle and Modern English: Historical Change*, 29–47. Osaka: Osaka Books.
Jacobs, Andreas and Andreas H. Jucker (1995) "The Historical Perspectives in Pragmatics," Andreas Jucker (ed.) *Historical Pragmatics*, 3–33. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
Kay, Christian and Kathryn Allan (2015) *English Historical Semantics*, Edinburgh: Edinburgh University Press.
Nesselhauf, Nadja (2012) "Mechanisms of language change in a functional system: The recent semantic evolution of English future time expressions," *Journal of Historical Linguistics* 2: 1, 83–132.
Stenström, Anna-Brita (1995) *An Introduction to Spoken Interaction*, Harlow: Longman.
Stoffel, Cornelis (1901) *Intensives and Down-toners: A Study in English Adverbs*, Heidelberg: Carl Winters Universitätsbuchhandlung.
渡辺拓人 (2016)「近代英語期英訳聖書における未来表現の変遷」『近代英語研究』第32号, 41–65.

(2017.1.18受稿, 2017.2.27受理)

Abstract

This study examines division of labor, rivalry, and replacement among four major Modern English verbs with the, mainly directive, meaning "Wait (a minute)" (hereafter Wait Verbs). These verbs include *stay*, *hold*, *stop*, and *wait*. We identify five common uses of these Wait Verbs. These include "[1] to tell someone to wait for a short while (on the spot)," "[2] to tell someone not to leave or stop going further," and "[3] to stop someone talking or doing something." We examine in which use or, occasionally, uses each of their attestations are employed and identify the division of labor between *stay* and *hold*, the two most common Wait Verbs in the first half of our survey period.

In general, both s*tay* and *hold* were mostly replaced by *stop* and later by *wait*; however, examinations of this replacement in each of the five different uses reveal that both its extent and manner differ according to the use in which they are used. For instance, while *stop* played only a minor role in the replacement with *wait* in use [1], it largely replaced *stay* and *hold* in both uses [2] and [3].